



千葉国際芸術祭 2025

Chiba City Arts Triennale 2025

ちから、ひらく。

令和7年度 実施計画書

2025年4月21日

千葉国際芸術祭実行委員会

目次

1.	主催あいさつ	1
2.	開催趣旨	2
3.	開催概要	3
4.	総合ディレクター メッセージ	4
5.	コンセプト	5
6.	「千葉国際芸術祭2025」の特徴	6
7.	ロゴ	10
8.	主なエリア・アーツフィールド	11
9.	参加アーティスト	14
10.	開催期間・時間・定休日等	15
11.	広報	16
12.	記録・アーカイブ	21
13.	公式グッズ	22
14.	事業推進体制	23
15.	その他	32
16.	スケジュール	33
17.	各アートプロジェクトについて	34
18.	その他のプロジェクト	70

主催者あいさつ

千葉国際芸術祭2025の本会期が、いよいよスタートします。

「市民参加型」の新たな芸術祭として、多くの市民の皆様参加を得ながら、また実行委員会に参画いただいた企業や団体をはじめとする官民連携のもと、これまでの2年間、プレ会期として実験的な企画や準備を進めてまいりました。

本会期では、32組の国内外のアーティストが、市内各地で多様なアートプロジェクトを展開します。市民参加も、ワークショップへの参加をはじめ、プロジェクトに応じた多彩なメニューが用意されています。このようなアートプロジェクトに参加する方々が歴史文化自然などの千葉市の地域の魅力を再認識し、共有することで、参加した一人ひとりの創造性がひらかれ、地域の新たなつながりを生み、地域そのものの活力と創造性が高まっていくことを目指しています。

千葉市は来年2026年に千葉開府900年を迎えます。まちの発展の変遷を振り返りつつ、千葉市の未来像について、市に関わりのある個人や団体等が一体となってその解像度を高め、実現する道すじについても共有する節目としたいと考えています。千葉開府900年の先行期間となる今年2025年に開催する千葉国際芸術祭2025が、より豊かな50年後、100年後の未来を実現していくための大切な一歩となるよう、取り組んでまいります。秋には、まちなかを回遊しながらアートプロジェクトの成果を鑑賞・体感していただける「集中展示・発表期間」も設けています。市内外の多くの皆様楽しんでいただき、千葉市の地域の力を改めて感じていただけたら幸いです。

コンセプトは「ちから、ひらく。」。

さあ、一緒に、自分だけの「ち」をひらきませんか。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

千葉国際芸術祭実行委員会 委員長

神谷 俊一



開催趣旨

千葉市は、千葉県の県庁所在地であり、98万人が生活する政令指定都市でありながら、都会と自然が共存する穏やかな都市です。房総の温暖な気候や東京湾に面する立地を活かし、古くは商業都市として栄え、やがて県政の中心地として成長し、高度経済成長期には全国から多くの人々が移り住み、多様な価値観が交錯する都市として発展してきました。それぞれ異なる特色を持った6区からなる千葉市は、豊かな自然・人材・歴史など、まちの新たな価値となる可能性を秘めた地域因子が多く眠っています。

それらを魅力的で持続可能な地域文化へと育てること、さらには、変化の時代において個と社会がどちらも健やかであり続けることの鍵を握るのは、市民の「創造性」です。創造性は、未来を思い描き、関係を編み直し、自分自身の可能性を捉え直す力です。そしてその力は誰もが本来備えているものです。だからこそ、すべての人が自らの創造性に出会い、それをまちへとひらいていく機会が必要です。そのきっかけとして、地域の可能性をひらく参加型アートプロジェクトの祭典「千葉国際芸術祭2025」を開催します。

千葉国際芸術祭2025は、まちなかの思わぬ場所がひらかれ、手をあげた人から活動がはじまり、アーティストも生活者も来訪者も、みんなで作る参加型の芸術祭です。いつもどおりの生活を超えて、新たなひと・こと・ものに出会うための機会を創出します。

本芸術祭は、地域における持続的な文化創造の礎となり、「人づくり」「まちづくり」「未来づくり」に寄与し、「個性豊かな新しい千葉文化の創造」の起点となることを目指します。

人づくり：新たな発見から「意識変容」が生まれる

アーティストの活動に触れ、自らの創造性をひらく体験をすることによって、新たな発見や気づきが起こり、意識の変化が生まれます。多様な価値観に触れる機会をつくることで、人とつながり、相互に理解し尊重をしながら、新しい挑戦へと踏み出す人を育てます。

まちづくり：「行動変容」がまちを変える

意識が変化した人々がそれぞれの立場で小さな行動を起こすことで、新たなコミュニティ形成や社会課題の解決、地域活性化につながり、まちの変化へとつながります。一人ひとりの活動が、心豊かで多様性と活力のある社会を形成します。

未来づくり：市民の創造性が「社会変容」を生み出す

市民の創造性とまちがシンクロする時、地域社会全体に影響を与える「社会変容」が起こります。それは「アート×コミュニティ×産業」の新たな関係性へと広がり、市民活動、企業活動、教育、国際交流など、多様な営みが有機的に接続し、新たなエネルギーが生み出されることへも繋がります。

開催概要

●名称

千葉国際芸術祭2025

●会期

2025年4月～12月

- ◎ まちなかりサーチ・制作期間：2025年4月～9月中旬
- ◎ 集中展示・発表期間：2025年9月19日（金）～11月24日（月・祝）
- ◎ 振り返り期間：2025年12月

※プロセスそのものが作品である「アートプロジェクト」では、上記3つの期間が一連となることで成り立つ。
どの期間でも市民が参加できるプログラム等を実施。

●主催

千葉国際芸術祭実行委員会

（千葉市、千葉商工会議所、千葉市文化連盟、公益財団法人千葉市文化振興財団、公益財団法人千葉市教育振興財団、千葉市美術館、公益社団法人千葉市観光協会、千葉テレビ放送株式会社、株式会社千葉日報社、日本放送協会千葉放送局、千葉都市モノレール株式会社、国立大学法人千葉大学、株式会社千葉銀行、東日本旅客鉄道株式会社千葉支社）

●総合ディレクター

中村 政人

総合ディレクター メッセージ

なぜ、人は創造するのか？

人類史においてアートや創造の歴史は、どの地域においても消えることなく連続と続いています。何故、なくなることなく生まれ継承されてきているのでしょうか？何故、人は表現し、生きる事とつくる事が一体化するようなアーティストが世界中に存在するのでしょうか？そもそも、何故、想像し創造する事を我々人類はおこなうのでしょうか？私は、この大きな命題を前提に今まで多くのアートプロジェクトを設計し実践し様々な立場、状況における「創造のプロセス」を解明したいと活動してきました。多様なアート表現の中でも、特に文化的処方としてのアートプロジェクトを地域社会で実践し続ける事で、これまで明確に解明されてこなかったアートの社会的効能が切り開かれていくと考えています。

「ちから、ひらく」をテーマに開催する千葉国際芸術祭2025は、まさしくこの市民の創造力を開花するための創造のスイッチを千葉市内に多くつくり出します。それは、いかにアートプロジェクトへの参加が市民の意識変容・行動変容を促し新たな社会変容を描きだすのか？新たな文化政策のチャレンジとも言えます。市民の価値観の変容がいかなる創造的な活動によって起こるのか？そして創造の連鎖がいかに持続していくのか？どんな世代、立場の人たちも身近な場所で心をひらき、市民全員がアーティストとして参加できる芸術祭をめざしていきます。

「千葉国際芸術祭2025」総合ディレクター
中村政人



中村 政人（なかむら まさと）

アーティスト／東京藝術大学美術学部教授
芸術未来研究場 アート×ビジネス領域長

1963年秋田県大館市生まれ。1993年「The Ginburart」（銀座）、1994年の「新宿少年アート」（歌舞伎町）でのゲリラ型ストリートアート展。秋葉原電気街を舞台に行なわれた国際ビデオアート展「秋葉原TV」（1999～2000）、「ヒミング」（富山県氷見市）（2004～2016年）、「ゼロダテ」（秋田県大館市）（2007～2019年）など、地域コミュニティの新しい場をつくり出すアートプロジェクトを多数展開。1997年よりアート活動集団「コマンドN」を主宰。2010年民設民営の文化施設「アーツ千代田3331」（東京都千代田区）（2010～2023年3月閉館）を創設。地域に開かれたアートセンターとして、約13年間運営を行う。2001年第49回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館に出品。マクドナルド社のCIを使ったインスタレーション作品が世界的注目を集める。2020年より「東京ビエンナーレ」の総合ディレクターを務める。著書に『美術と教育』（1997）、写真集『明るい絶望』（2015）、『新しいページを開け！』（2017）、『アートプロジェクト文化資本論:3331から東京ビエンナーレへ』（2021）。平成22年度芸術選奨受賞。2018年日本建築学会文化賞受賞。

ちから、ひらく。

芸術祭を通じ、千葉の「地」からもの・こと・ひとを拓くこと。

多様な「ち」（千葉、地、力、知、宙、超、智…etc.）から創造活動をはじめること。

千葉のひとびとの「ちから」が開花すること。

コンセプトの「ちから、ひらく。」には、千葉国際芸術祭2025で実現したい複数の夢を込めました。

「千葉国際芸術祭2025」の特徴

1. 「市民参加型」の芸術祭

本芸術祭は「市民参加型」であることを大きな特徴としています。市民一人ひとりが主体となり、誰でも多様なかたちで芸術祭に参加できる仕組みを設けています。たとえば、アーティストと共に作品やプロジェクトの創作プロセスに関わること、プロジェクトのチームメンバーとして協働すること、ワークショップに参加して実際に手を動かし表現すること、作品を鑑賞・体験すること、自ら作品を制作・発表すること、リサーチの対象として関わること、ドネーションによって活動を支援すること、あるいはトークイベントに参加して学んだり、ワークショップを通じてアーティストと共に対話したり作品をつくったりすることなど、関わり方は多様です。

参加を通じて、まちをアーティストの視点で見つめ直すことで、日常では気づかなかった新たな価値や魅力を発見する機会が生まれます。そして、その体験は参加者と地域との関係性を更新し、より能動的で創造的なまちとの関わり方へとつながっていきます。



「千葉国際芸術祭2025」の特徴

2. 「アートプロジェクト」を重視

本芸術祭は、単にアート作品を巡る「鑑賞型」の芸術祭ではなく、市民や来訪者が表現や対話のプロセスに主体的に関与する「体験重視型」の芸術祭です。その中核をなすのが「アートプロジェクト」です。

アートプロジェクトとは、アーティストだけが制作する「アート作品」とは異なり、そのプロセスに人々が関わり、対話や協働を通じて新たな関係や価値を生み出すアート表現です。特に本芸術祭では「人々の創造的な営みを喚起する『出来事』を生み出すもの」として捉えています。作品の完成形のみを提示するのではなく、アーティストと人々が共に考え、手を動かし、語り合い、関係を結び直していくプロセスそのものに価値を置いています。ワークショップや共同制作、リサーチ活動やまちなかでの実践を通じて、参加者一人ひとりの創造性がひらいていく機会が生まれていきます。

本芸術祭は一過性の観光的イベントではなく、千葉市内外に暮らす人々がアートを契機として新たな視点や関係を獲得し、中長期的に日常を豊かにしていくための取り組みです。創造性の循環を生み出すアートプロジェクトの積み重ねを通じて、市民と地域に持続可能な文化創造の土壌を築くことを目指します。



「千葉国際芸術祭2025」の特徴

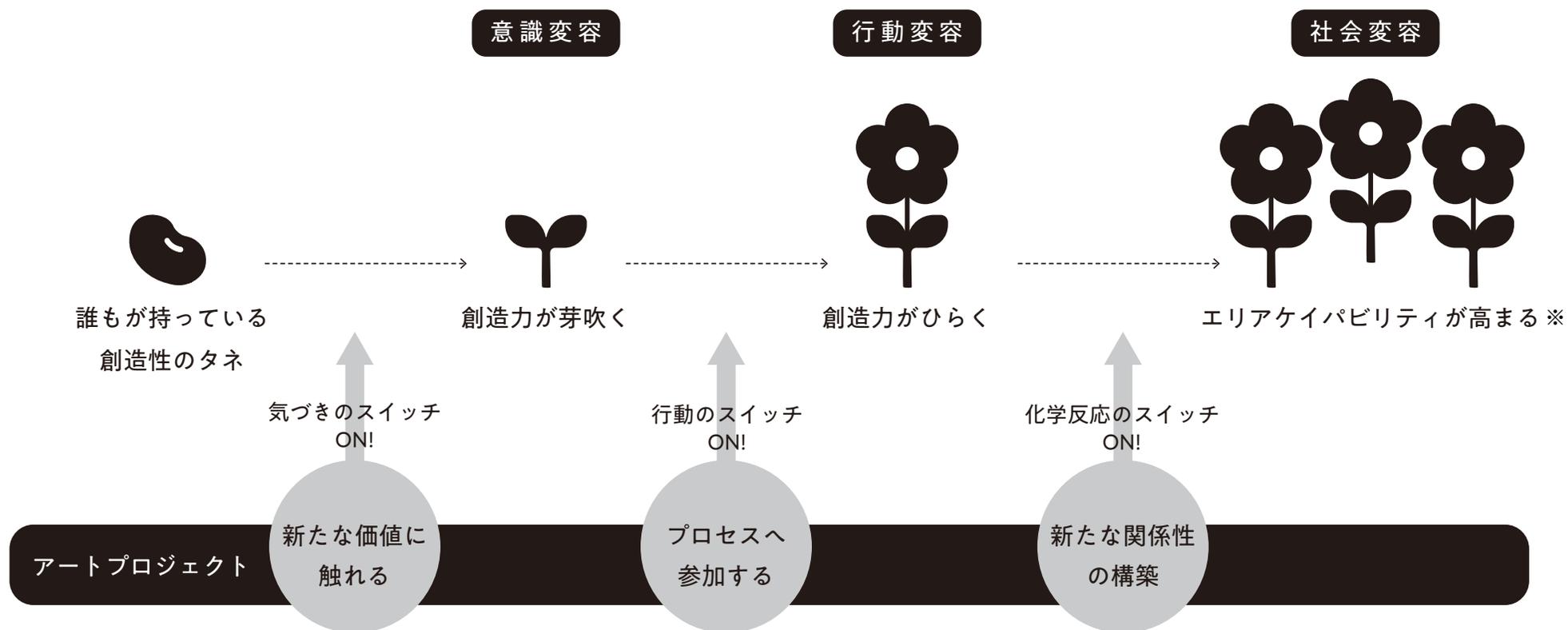
3. 「アーツフィールド」をひらく

本芸術祭では、特定のメイン会場を設けず、これまで日常の中に埋もれがちな都市の隙間や空き店舗、公共空間など、地域の魅力を備えた知られざる場所を、アーティストの視点で掘り起こし、アートプロジェクトの拠点として活用します。これらの拠点は「アーツフィールド（文化創造拠点）」と称し、芸術祭期間中の活動拠点にとどまらず、芸術祭終了後も市民が日常的に文化芸術活動に取り組む「創造的活動の場」として継続的に活用されていくことを目指します。

こうしたアーツフィールドが市内各所にひらかれていくことで、まち全体に創造的な活動の場が増え、地域の見え方や価値の捉え方に変化が生まれます。その結果、市民の地域への愛着や誇り（シビックプライド）の醸成にもつながっていくと考えています。



「千葉国際芸術祭2025」の特徴



※エリアケイパビリティ：人々が地域の環境的豊かさを能動的・主体的に高め、その環境が有する資源を用いて地域が質的に豊かになる能力のこと

ロゴ

〈メインロゴ〉



千葉国際芸術祭 2025

Chiba City Arts Triennale 2025

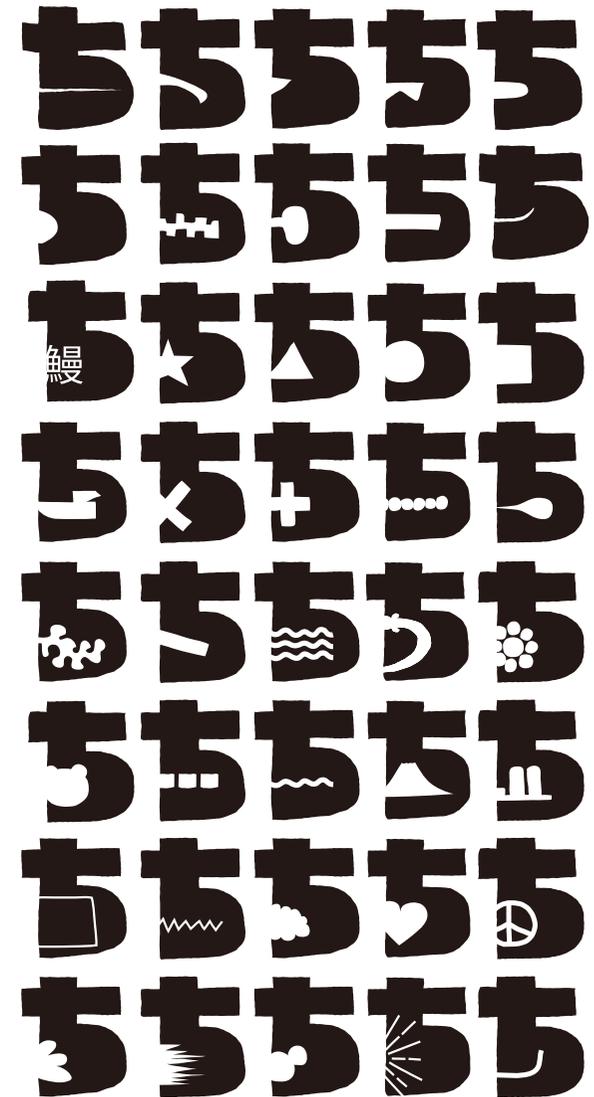
ちから、ひらく。

〈デザインコンセプト〉

「ち」の文字が持つ多様な意味と、その豊かな表情から着想してデザインしました。しなやかでありながら力強く、なおかつ親しみのある「ち」をベースとし、そこにサブ要素として様々な表情を加えることでVI※として展開していきます。市民参加型芸術祭としての寛容さ、また芸術祭を契機に多様な個性や活動が生まれていく姿を表し、「参加したい」と感じる期待感を持たせています。

※VI：ヴィジュアルアイデンティティ

〈ロゴのサブ要素展開〉



主なエリア・アーツフィールド

「千葉国際芸術祭2025」では、千葉市内各地にアーツフィールド（文化創造拠点）を設け、参加型アートプロジェクトを実施します。特に拠点が集中する地域を「エリア」と名付け、主な開催地として以下のようなエリアを設定しています。今後、芸術祭を開催していくごとにエリアが拡大していくことを目指します。

●主なエリア

千葉駅周辺エリア

市場町・亥鼻エリア

千葉市役所周辺エリア

西千葉エリア

千葉公園周辺エリア

海浜エリア



●主なアーツフィールド

千葉市役所／国道357号上部空間／そごう千葉店／アーツうなぎ／千葉都市モノレール 県庁前駅／花見川／花見川団地

西千葉工作室／旧高洲第二中学校／千葉市動物公園／千葉県こども病院／ほか

主なエリア・アーツフィールド

千葉駅周辺エリア

千葉市中央区に位置し、ターミナル駅「JR千葉駅」を中心としたエリア。百貨店や商店、飲食店、公共施設、文化施設、オフィス、大型マンションなど、生活や文化に根ざした建物がひしめく賑やかな地域です。このエリアでは、地域に根ざした百貨店「そごう千葉店」や公共施設、ビルの一室などでアートプロジェクトを展開することで、多くのひとびとに芸術祭に参加するきっかけをつくり、さらなるまちの賑わい創出にも繋げていきます。

市場町・亥鼻エリア

千葉県庁近くにあり、かつての千葉市中心街として栄えたエリア。個人商店のほか、重厚な近代建築が特徴的な千葉県立図書館や、天守閣を模した千葉市立郷土博物館（通称・千葉城）等もあり、世代交代の課題は抱えつつも歴史を感じる地域です。空き店舗では複数のアーティストが制作拠点を構えています。千葉国際芸術祭2025では、歴史ある商店をリノベーションして文化創造拠点を形成し、アーティストが地域の歴史や文化を大切にしながら新しい表現に挑戦することで、エリアの再活性化と新たな関係創出を目指します。

千葉公園エリア

千葉公園は、季節ごとの自然を楽しみ、ボート遊びや様々なスポーツもできる18.6ヘクタールの総合公園です。県指定天然記念物でもある古代ハス「オオガハス」を栽培し、開花の時期には多くの人が足を運ぶ名所でもあります。また、2024年4月にオープンした「芝庭」は、カフェ等が隣接する広場として幅広い層から人気を集めています。近隣では民間企業による地域活性化も盛んで、カフェや商店、コワーキングスペース等の人気施設も増えています。千葉国際芸術祭2025では、豊かな自然環境を活用したアートプロジェクトを展開し、公園やまちの新しい使い方を提案します。

西千葉エリア

JR西千葉駅・京成みどり台駅周辺からなる西千葉エリアは、幼稚園から専門学校・大学まで多数の教育機関が密集している学術的な地域です。また、ボトムアップ型のまちづくり活動が盛んな地域としても注目を集めています。個性的な店舗や地元住民が集う屋外空間、公共アート作品、企業のオフィスなども増加しつつあり、近年盛り上がりを見せるエリアでもあります。千葉国際芸術祭2025では、西千葉にすでにある文化創造拠点や人のつながりを活かしながら、幅広い層にアプローチする参加型アートプロジェクトを展開し、さらなる地域の活力を生み出します。

主なエリア・アーツフィールド

千葉市役所周辺エリア

千葉市役所周辺は、港や公園に囲まれた眺望の良いエリアです。なかでも2023年にオープンした千葉市役所本庁舎は、建築家・隈研吾氏の設計による新たな公共施設として誕生しました。市民向け窓口のみならず、広く活用できるコミュニティスペース等も備えた新たな形の公共施設です。また、市役所に近接した国道357号の上部空間は、まちに賑わいを創出する社会実験にも活用されています。千葉国際芸術祭2025では、アートプロジェクトを通じ、これまで公共施設や公共空間に魅力を感じなかった人にも訪れる機会を提供し、新たな体験や活動の創出に繋がっていきます。

海浜エリア

海浜エリアは、東京湾に面し、生活と産業、静けさと賑わいがゆるやかに交差します。高度経済成長期の面影を残し多様な世代・国籍のひとびとが暮らす団地群、新住民が多く暮らす高層マンションや宅地群、大規模工場が並ぶ光景は、この地域ならではのスケール感と空気感をつくり出しています。一方で、整備された海辺の緑地や公園も多く、風を感じながら過ごせる余白も豊富。近年はウォーターフロントの開発や利用の動きも見られます。千葉国際芸術祭2025では、アートプロジェクトを通じ、新旧住民の新たな関係創出やまちの活性化のきっかけを生み出します。

参加アーティスト

安西 剛

伊東 敏光

岩沢兄弟

上野 悠河 ※

宇治野 宗輝

加藤 翼

栗原 良彰

鈴木 のぞみ

諏訪部 佐代子 ※

第二副都心 ※

高嶺 格

地村 洋平 ※

手と具 ※

TMPR

西尾 美也

西原 珉 (キュレーター)

沼田 侑香 ※

檜皮 一彦

藤 浩志

前島 悠太

水口 理琉

宮本 はなえ ※

箭内 道彦

Alexey Krupnik (ロシア) ※

Alina Bliumis and Jeff Bliumis (アメリカ) ※

Chaal.Chaal.Agency, with lead artists

Sebastián Trujillo-Torres and Kruti Shah (コロンビア・インド) ※

GregoryMaass & Nayoungim (ドイツ・韓国)

Maša Travljanin (スロベニア) ※

Shi Yuxin (中国) ※

Simon Whetham (イギリス) ※

Slow Art Collective (日本・オーストラリア)

Zhang Jie (ReBuild Lab) (中国) ※

計 32組

※千葉国際芸術祭2025 アーティスト公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」により選出

開催期間・時間・定休日等

開催期間・時間・定休日

プロセスそのものに価値があるアートプロジェクトは、大まかに分けて「リサーチ・制作」「展示・発表」「振り返り」の3つのプロセスから成り立ち、この一連のプロセスを含む活動全体が作品です。どのプロセスでも市民のひとびとの関わりしるをもち、参加できる場やプログラムを用意します。

- リサーチ・制作期間：4月～9月中旬
 - ・プロジェクトやイベントごとに開催日時を設定
- 集中展示・発表期間：9月19日（金）～11月24日（月・祝）
 - ・毎週水曜日定休
 - ・10:00～18:00をコアタイムとして各会場やプロジェクトごとに設定
- 振り返り期間：12月
 - ・プロジェクトやイベントごとに開催日時を設定

市民ボランティア

本芸術祭の開催には、多くの人の協力が必要です。会期中の運営サポートスタッフを、幅広い年代から募集します。また、サポートスタッフとして関わったことをきっかけに、地域活動へも興味を持つような意識変容にもつなげていくことを目指します。

参加費

アートプロジェクトやイベント・ワークショップの実施内容や参加方法などに応じて無料の場合・有料の場合を検討していきます。

移動手段

本芸術祭の開催エリアは広範囲に及ぶため、スムーズな移動手段を案内します。また、多くのアートプロジェクトに加えて、地域のお店やイベントなどを回遊して楽しんでもらえるよう、情報の発信に努めます。

〈想定する移動手段〉

①公共交通等の利用促進

JR総武線や京葉線をはじめとする鉄道、千葉都市モノレール、バスなどの公共交通による移動や周遊ルートウェブサイトで案内し、円滑な移動をサポートします。併せて、より身近な市民の足であるシェアサイクルの案内も行います。

②自動車移動者へのサポート

ウェブサイトで駐車場案内や現地での看板設置など、わかりやすい案内に努めます。

広報

広報活動の目標

①千葉国際芸術祭の魅力を市内外の多くの人に届ける

市の資源を活かした創造的なプロジェクトや、多様な価値観や視点を投げかける体験など、千葉国際芸術祭の魅力を広く発信し、集客を図ります。

②千葉国際芸術祭への市民参加を促す

アーティストと市民が共に創り上げていく市民参加型芸術祭であることを強く発信し、市民参加を促します。

③千葉市のイメージ向上に寄与する魅力を発信する

千葉市民の誇りとなり、地域に目を向けるきっかけとなるように、市の魅力が伝わる情報発信を行います。

広報活動における基本方針

①本会期に向けた長期的な視点で芸術祭の認知拡大を目指す

千葉国際芸術祭は、複数年に渡り長期間展開していく芸術祭であり、プロジェクトと併行した継続的な広報が求められます。プレ会期から本会期に向けて、継続的に市内外の多くの集客を図るため、長期的な視点で多面的な広報を展開し、芸術祭の認知拡大を図ります。

②「市民参加型の芸術祭」であることを強く発信する

千葉国際芸術祭は、アーティストと市民が共に創り上げていく市民参加型芸術祭を目指しています。多様な市民が広く、気軽に参加できる市民参加型芸術祭であることを強調し、市民参加を促すための広報を展開します。

③多様なプロジェクトを一体的なイメージにまとめ上げる

千葉国際芸術祭は、場所も内容も多様なプロジェクトを長期間展開していく芸術祭です。各プロジェクトの情報に関連を持たせ、千葉国際芸術祭としての一体的なイメージを確立します。

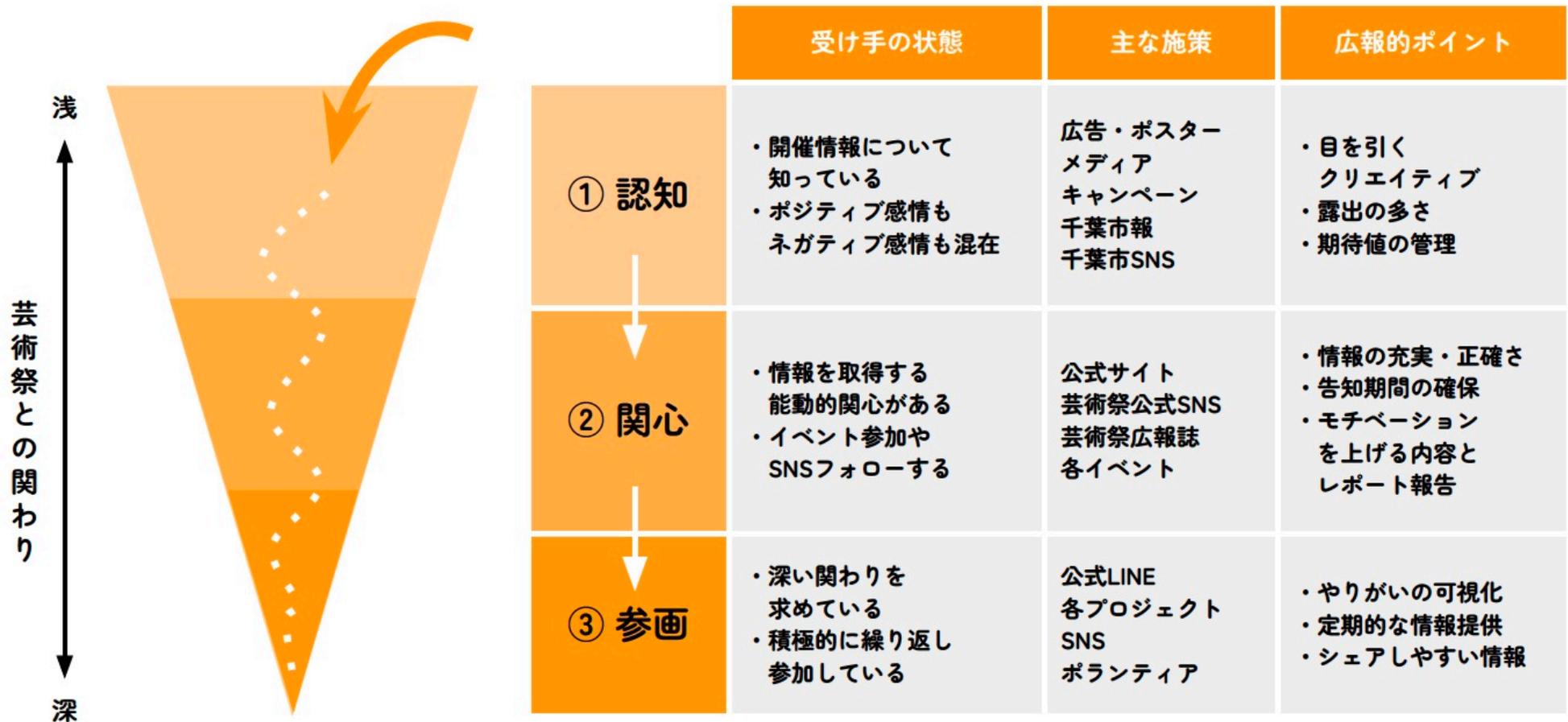
④アクセシビリティや社会的公正さに配慮した情報提供を実施する

千葉国際芸術祭では、多様な主体の尊重とつながりの創出を重視したプログラムを実施していきます。年齢や性別、障害の有無や国籍に関わらず、多様な人が芸術祭情報にアクセスし、楽しみ、尊重されるための仕組み・場づくり・情報保障を行います。

広報

広報基本戦略／①広報構造と施策

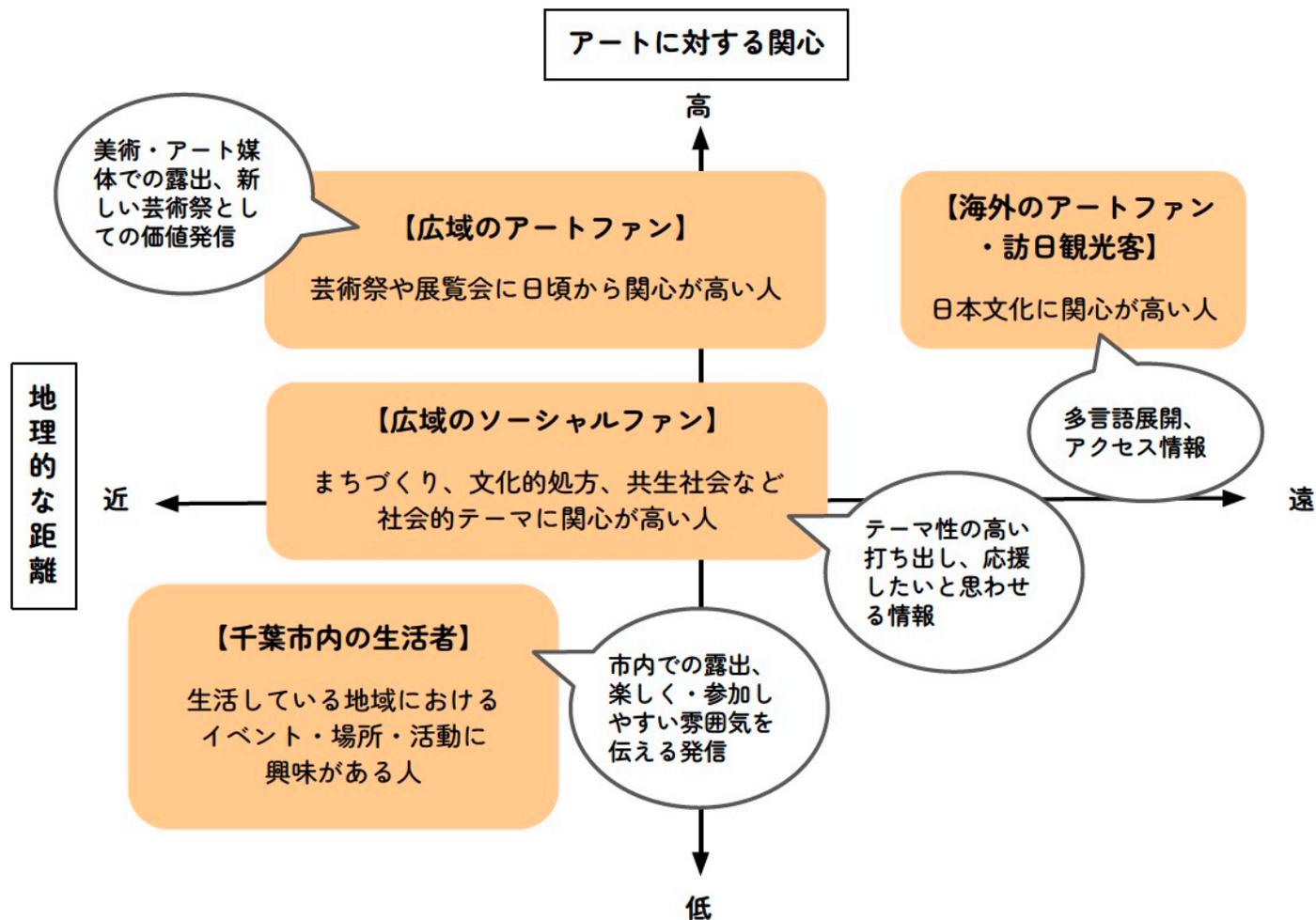
「認知」「関心」「参画」の3フェーズを前提とした最適な施策を展開します。



広報

広報基本戦略／②広報ターゲット

“総花的”ではない、4つの関心事別セグメントに合わせた戦略的情報発信を展開します。



広報

広報施策の詳細

情報発信を行うメディアを4グループに分け、スムーズかつ多面的な運用を実現します。

メディア種別			運営方針／重点ポイント
本部運営 メディア	千葉国際芸術祭事務局が直接運営し、総合的な公式情報を発信するオウンドメディア	【ウェブサイト】芸術祭公式ウェブサイト 【公式SNS】Instagram、X、Facebook、LINE、YouTube等 【その他】ポスター、フライヤー、リーフレット、カタログ、アプリ、イベント等	【ウェブサイト】※2025年6月本サイト公開予定 ・機運醸成：伝わるビジュアル&メッセージを掲載 ・信頼性：正確な情報を適時掲載 ・回遊性：詳細なMAP・エリア・開催情報を掲載 ・参加性：各プロジェクトのプロセス発信 【公式SNS】 ・コンパクトかつタイムリーな情報発信を重視
プロジェクト 運営メディア	各アートプロジェクトの運営チームがイベント情報などを発信するメディア	【SNS】Instagram、X、LINE、Facebook、YouTube等 ※プロジェクトごとに異なる	【SNS】 ・自律性+柔軟性：プロジェクトの性質や体制に合わせてプラットフォームや運用方法を検討する ・統一性：基本情報の発信ルールを取り決め、千葉国際芸術祭2025としてのブランド感を統一する
関係団体 メディア	千葉市や芸術祭実行委員会参加団体が関わるメディア	市報、千葉市公式SNS（LINE、X、Facebook、YouTube等）、関連団体の公式SNS等	各メディアが求める情報を定期的に提供できるよう、プレスリリースや発表会はもちろんのこと、情報提供を細かく行う関係性を築く
マスメディア	媒体社による商業メディア	テレビ、ラジオ、新聞、ウェブメディア、フリーペーパー、SNSインフルエンサー等	各メディアが求める情報を定期的に提供できるよう、プレスリリースや発表会はもちろんのこと、情報提供を細かく行う関係性を築く

広報

スケジュール

ターゲット	4-5月	6-8月（集中展示・発表前注力期間）	9-11月（集中展示・発表期間）	12月
全体	公式SNS発信・SNS広告展開（適宜）			
	ポスター掲示・のぼり掲示・フライヤー配布・デジタルサイネージ・展開			
	ティザーサイト	記者発表会	公式ウェブサイト（アーティスト情報・地域情報・イベント情報など詳細を掲載）	
市内生活者向け	ローカル媒体・マス媒体での掲載アプローチ			
	地域拠点・公共施設等でのポスター掲示・のぼり掲示・フライヤー配布・デジタルサイネージ展開			
広域のアートファン向け	美術・アート・カルチャー系媒体での掲載アプローチ		専門家・批評家の招聘ツアー等	トーク企画等
	公式ウェブサイト・SNSを通じたアーティスト情報・プロジェクト情報・メッセージ発信			
広域のソーシャルファン向け	地域・ソーシャル系媒体での掲載アプローチ		テーマ性の高いトークイベント開催等	
海外のアートファン・訪日観光客向け	ティザーサイト	公式ウェブサイトにおける英語での情報発信		
	海外アーティストによるSNS発信			

記録・アーカイブ

芸術祭の持続可能性に寄与する知見共有・記録を行います。千葉国際芸術祭がトリエンナーレ（3年毎の定期開催）であることを想定し、持続的な活動に寄与する知見共有やアーカイブ作成を行います。具体的には以下のような内容を記録します。

記録する主な情報

- ・ 運営に関する記録
基本情報、体制、スケジュール、議事録など運営に関する情報
- ・ 実施に関する記録
各プロジェクトの企画内容や開催イメージなど写真や動画も含めた情報
- ・ 広報に関する記録
メディアリストやメディア掲載履歴、プレスリリース等の情報
- ・ 地域資源に関する記録
地域情報や拠点情報などの情報
- ・ 成果に関する記録
来場者数やアンケート、関係者振り返りなどの情報

主な記録方法

- ・ ドキュメント
- ・ ウェブサイト
- ・ 写真
- ・ 動画
- ・ アーカイブブック

※上記を基本としつつ、プロジェクトの進捗や体制、内容に合わせて最適な記録する情報内容・方法を適宜検討して実行する。

公式グッズ

本芸術祭に親しみを感じてもらい、継続的な関心や愛着を育むための手がかりとして、公式グッズの展開を検討します。グッズは一方的な販売物ではなく、芸術祭の記憶を持ち帰る手段であり、日常の中でこの祭がふと立ち上がるような存在でありたいと考えています。単なる物販にとどまらず、「応援したくなる」「手元に置きたくなる」文化的ファンベースの醸成を目指したアイテムやデザインを検討します。



クリアファイル



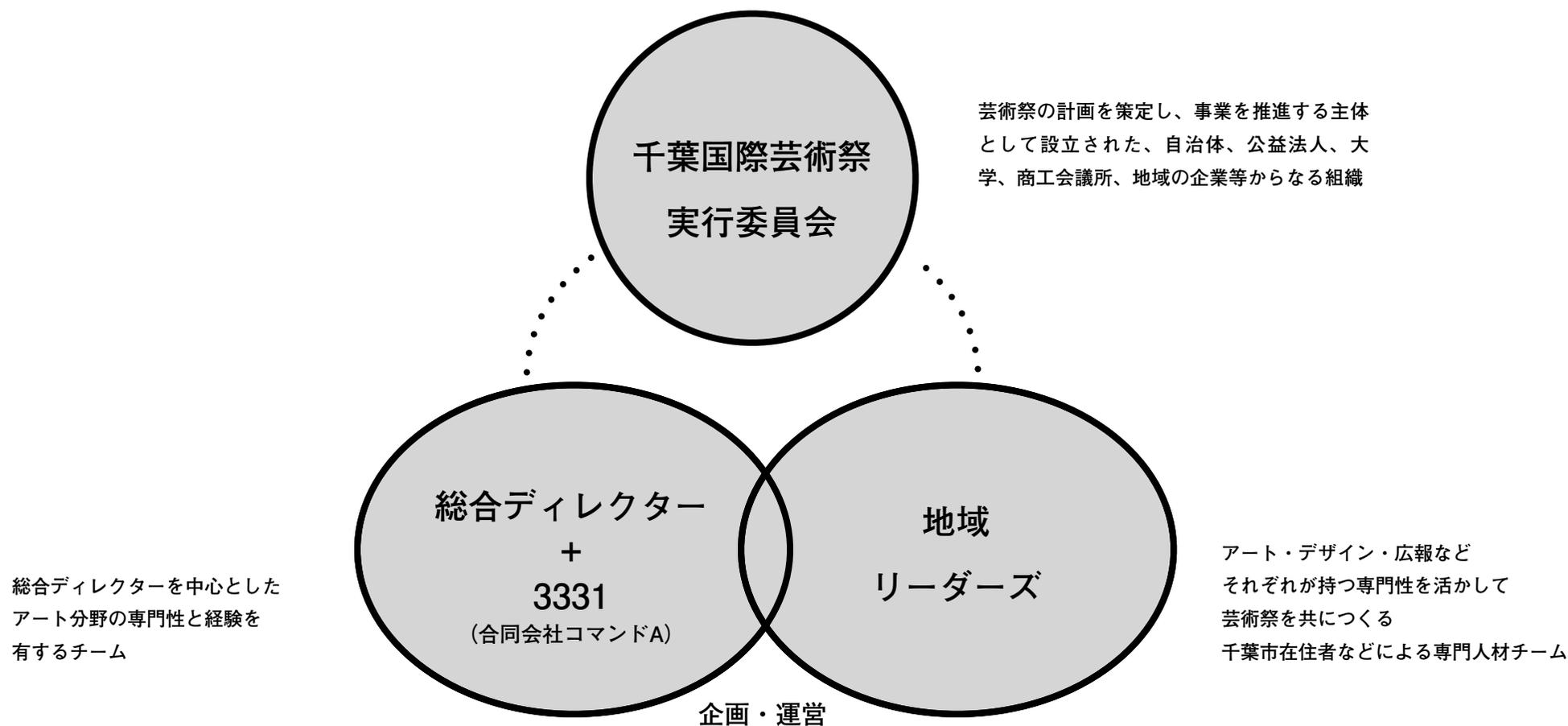
缶バッジ



ステッカー

事業推進体制

本芸術祭は、「実行委員会」「総合ディレクター+3331」「地域リーダーズ」の三者が連携し、企画から運営までを一体的に推進します。実行委員会は、芸術祭の全体計画を策定し、事業を推進する主体として機能します。総合ディレクター率いる3331はアート分野における専門性と豊富な経験を活かして、芸術部門全体の統括を担い、アーティストの招聘や企画構成、運営等において中核的な役割を果たします。地域リーダーズは、千葉市在住者を中心とする専門人材チームであり、アート、デザイン、広報等の分野で実務的・創造的な貢献を行います。それぞれが有する知見やネットワークを活かし、地域に根ざした芸術祭の共創を担います。三者は緊密に連携を取りながら、それぞれの役割と強みを補完し合い、市民参加型の芸術祭の実現を目指します。



事業推進メンバー

千葉国際芸術祭実行委員会

- 委員長：千葉市長 神谷 俊一
- 副委員長：千葉商工会議所 会頭 佐久間 英利
- 委員：
 - ・ 千葉市文化連盟 会長 磯野 和美
 - ・ 公益財団法人千葉市文化振興財団 理事長 宍倉 和美
 - ・ 公益財団法人千葉市教育振興財団 理事長 飯田 正夫
 - ・ 千葉市美術館 館長 山梨 絵美子
 - ・ 公益社団法人千葉市観光協会 会長 足立 久男
 - ・ 千葉テレビ放送株式会社 代表取締役社長 青柳 洋治
 - ・ 株式会社千葉日報社 代表取締役社長 中元 広之
 - ・ 日本放送協会千葉放送局 局長 綱島 浩三
 - ・ 千葉都市モノレール株式会社 代表取締役社長 小池 浩和
 - ・ 国立大学法人千葉大学 学長 横手 幸太郎
 - ・ 株式会社千葉銀行 地方創生部長 小川 利幸（監事）
 - ・ 東日本旅客鉄道株式会社千葉支社 支社長 土澤 壇
 - ・ 千葉市教育委員会 教育長 鶴岡 克彦
 - ・ 千葉市市民局 局長 那須 一恵
 - ・ 千葉市経済農政局 局長 安部 浩成
 - ・ 千葉市会計室 会計管理者 折原 亮（監事）

部会

- 議長：美術史家・美術評論家 水沢 勉
- 副議長：千葉市美術館 館長 山梨 絵美子
- 委員：独立行政法人国立美術館国立アートリサーチセンター
主任研究員 稲庭 彩和子

企画・運営

- ・ 総合ディレクター：中村 政人
- ・ プログラムディレクター／アートプロジェクトディレクター：彦根 延代
- ・ ジェネラルプロデューサー／クリエイティブディレクター：西山 芽衣
- ・ プログラムマネージャー：両見 英世
- ・ リエゾンディレクター／市場町・亥鼻エリアディレクター：いわさわ たかし
- ・ 広報コミュニケーションディレクター：中田 一会
- ・ 千葉駅・千葉市役所周辺エリアディレクター：渥美 雅史
- ・ デザインディレクター：佐藤 大介
- ・ アートプロジェクトマネージャー：佐々木 美佐子
- ・ 海外アーティストマネージャー：米林 ジョイ
- ・ 広報コーディネーター：大貫 愛
- ・ アートプロジェクトコーディネーター／海外アーティスト担当：胡 昕雨
- ・ アートプロジェクトコーディネーター：黄 志遣
- ・ グラフィックデザイナー：仲西 空良

メンバープロフィール

プログラムディレクター
アートプロジェクトディレクター



彦根 延代

2017年より合同会社コマンドA（屋号「3331」）に参画。現在同社にてアートプロジェクト事業部マネージャーを務める。同社が運営し2023年3月末で閉館したアートセンター「3331 Arts Chiyoda」では、若手アーティスト支援事業の一貫で行われた「3331 ART FAIR」や若手作家の個展シリーズを担当したほか、自主企画展を複数担当。コマンドA参画以前は、美術館学芸員、パブリックアート企画制作、インキュベーション企業でのアートビジネスの立ち上げに携わるなど、アート（アーティスト）と社会を繋げる活動に一貫して取り組んでいる。女子美術大学非常勤講師（2023年～現在）。

ジェネラルプロデューサー
クリエイティブディレクター
西千葉エリアディレクター



西山 芽衣

〈千葉市在住〉

1989年、群馬県生まれ。千葉大学工学部建築学科を卒業。大学時代から千葉市に暮らす。2012年にまちづくりの企画プロデュースを行う（株）北山創造研究所に入社。西千葉の地域活性化プロジェクトを担当する中で2014年に「HELLO GARDEN」「西千葉工作室」の企画・立ち上げを行う。場づくりに継続的に関わりたいと思い、2015年に「HELLO GARDEN」「西千葉工作室」の運営母体であるマイキーへ移籍。企画・コンテンツ開発・アートディレクション・人材育成など幅広いスキルを活かして、西千葉のみならず日本全国で生活者の日常の舞台となる場づくりと人々の創造的な活動のサポートに取り組む。

メンバープロフィール

プログラムマネージャー



両見 英世

1982年、千葉県生まれ。ウェブ開発会社やフォント開発会社を経て独立。デザインを軸に、地域や福祉の分野で役割を問わず活動を続ける。これまで、小学生とまちを取材・発信する活動や、クリエイターを先生に迎えたワークショップの企画・運営をはじめ、四街道市の日々の暮らしを発信するプロジェクトや、新たな音頭の制作に携わってきた。カフェを開業し、空間づくりにも取り組んでいる。

リエゾンディレクター
市場町・亥鼻エリアディレクター



いwasawa たかし

〈千葉市在住〉

1978年千葉県千葉市生まれ、武蔵野美術大学短期大学部卒業。「岩沢兄弟」の弟。2002年有限会社バッタネイションを兄とともに設立。コンセプト設計からディレクションを担当。2009年、東京日本橋にライブ配信に対応したキッチン付きイベントスペースを開設。その後「KOIL（柏の葉オープンイノベーションラボ）」「かみす防災アリーナ」の家具制作、アートプロジェクト「HAPPY TURN /神津島」の拠点づくりなどに参加。芸術祭には、アートユニット「KMSI」のメンバーとして「KENPOKU ART 2016」に参加。「岩沢兄弟」として「瀬戸内国際芸術祭2022」「百年後芸術祭2023」に参加している。2022年には千葉市美術館「つくりかけラボ06 岩沢兄弟 | キメラ遊物園」で作品を発表。

メンバープロフィール

広報コミュニケーションディレクター

中田 一会

〈千葉市在住〉



1984年生まれ、2017年より千葉市在住。武蔵野美術大学芸術文化学科卒業。2007年～2010年、東証一部上場の出版社にて経営企画室IR（投資家向け広報）担当、社内報担当、女性向け出版部門の企画編集を担う。2010～2015年、（株）ロフトワークのPR兼コミュニケーションディレクターとして勤務。2015年～2018年、（公財）東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京に在籍。アートプロジェクト事業で中間支援と情報発信を担う。2018年、千葉市にて「きてん企画室」を設立。2021年、（株）マガジンハウスのウェブマガジン「こここ」編集長として媒体を創刊。文化、福祉、地域の広報・編集を手がける。

千葉駅・千葉市役所周辺エリアディレクター

渥美 雅史

〈千葉市在住〉



1984年三重県生まれ、千葉市在住。東京藝術大学大学院彫刻専攻修了後、地方公務員を経て千葉大学大学院専門法務研究科修了。その後、アート事業会社にて越後妻有大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭、百年後芸術祭などの地域芸術祭でアートディレクション・アート法務担当として従事。また、美術館やアーティストのアートインストールの設計・施工管理も行う。現在は独立し、全国のアート関連施設・企業・アーティストと展覧会やアートプロジェクトの企画・制作を行い、アートの実現をサポートしている。

メンバープロフィール

デザインディレクター

佐藤 大介

〈千葉市在住〉



2007年に株式会社スタートトゥデイ(現ZOZO)に入社。ZOZOTOWNのサイトデザインを始め、アプリデザイン、プロモーションなど多岐に渡りデザインを担当。2017年からZOSUITのデザインやUI/UX、プロモーション、またZOZOのプライベートブランドの様々なデザイン領域を担当する。2020年よりブランディングデザイン部ディレクターとして、ZOZOのCIに関わるデザインを担当し、地域に向けた commons を併設するオフィス『ZOZOSTUDIO』のデザインや、千葉市と連携した幕張ビーチ花火フェスタのVIデザイン、また地域のお祭りや文化祭のポスターデザインまで、さまざまなデザイン領域で活動。また、デザインコレクティブCoutworks.comを主宰し、枠にとらわれない様々なデザイン活動も行う。

アートプロジェクトマネージャー

佐々木 美佐子

〈千葉市在住〉



多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業。食品メーカー宣伝部に在籍し、クリエイティブ部門の責任者を担う。パッケージデザインやCM制作など消費者とメディアの接点の変遷に合わせたコミュニケーションに取り組んできたが、このたび一念発起し、APマネージャーの道に。千葉市に暮らすようになって30年目を迎える2025年に芸術祭に関われることに喜びを感じ、企業での経験を活かして地元へ恩返ししたいと考えている。

メンバープロフィール

海外アーティストマネージャー

米林 ジョイ



アメリカ人の両親の仕事によって横浜で生まれ、東京練馬区江古田で育つ。大学はワシントン州立大学（シアトル）で日本文学と東アジア美術史を専攻。昭和60年、1年間だけのつもりで日本へ戻るがそのまま住みつく。結婚後、子育てをしながら美術、教育、ビジネス等の分野で翻訳、通訳、プロジェクトコーディネーションに長年取り組む。これまで千葉市にはあまりゆかりがなかったが、本芸術祭をきっかけに、千葉市の良い所、市民の良い心を外国人アーティストと一緒に探検し、新しい出会いと創造を生みだしていきたい。

広報コーディネーター

大貫 愛

〈千葉市在住〉



1987年生まれ、栃木県出身。茨城大学人文学部社会科学科卒。卒業後は旅行業界にて主に海外旅行手配業務に従事。BtoBとBtoCどちらの事業にも携わり、個人旅行からMICE関連ツアーまで幅広く経験。海外でも経験を積みみたいという気持ちから、2016年よりベトナムのランドオペレーター会社に勤務する。ベトナム滞在中に日本語教育に興味をもち、2019年からはベトナムの公立中学校で日本語クラスのアシスタントとして活動。コロナ禍の2020年に帰国し、縁あって千葉での暮らしをスタート。現在は株式会社マイキーに所属し、これまでの経験を総合的に活かしながら地域活性プロジェクトに取り組んでいる。

メンバープロフィール

アートプロジェクトコーディネーター
海外アーティスト担当



胡 听雨

1998年生まれ、中国浙江省出身。女子美術大学大学院アートプロデュース研究領域卒業。大学時代はプロダクトデザインの勉強のため台湾で過ごし、その後日本に渡りアートプロデュースを学ぶ。学生時代から多様な芸術活動に積極的に参加し、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）プロジェクトにも深く携わり、その経験を通じて制作者としての自身の視野を広げると共に、相対する様々なアーティストへの理解も深めてきた。自らの仕事を通じて、よりドラマティックな反応を引き起こし、プロジェクト（アーティスト）の物語をより感動的なものにしたいと考えている。また、観客の体験も重視し、観客自身が鑑賞にとどまらず芸術に参加し、楽しめるような場作りにも力を注いでいる。

アートプロジェクトコーディネーター



黄 志道

〈千葉市在住〉

中国出身。2017年に中央美術学院を卒業。2023年に東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻を修了。2021年から東京の山谷地区を拠点として「再来さんやー小さい芸術祭」を企画運営している。高度成長を遂げた都市における現象に着目し、個人と社会の関係性を研究するかたわら、日常生活の中で繊細な感情を味わい、主に写真やインスタレーションなどの手法を用いた作品も制作している。

メンバープロフィール

グラフィックデザイナー

仲西 空良

〈千葉市在住〉



1997年生まれ、長野県出身。千葉工業大学大学院 創造工学研究科デザイン科学専攻修了。2023年にヤフー株式会社（現LINEヤフー）へUI/UXデザイナーとして入社。ヤフーショッピングのランディングページやバナー、紙面ポスターなどの販促クリエイティブ、アプリ内のUI/UX設計やデザインシステムの構築・運用を担当。個人ではWeb・ロゴ・グラフィックなど領域を問わず幅広くデザインを手がける。

その他

企業協賛・寄付・協力

本芸術祭の開催趣旨に賛同する企業の協賛・寄付・協力を得ることで、強固なパートナーシップの構築につなげ、芸術祭と社会とのつながりの創出・拡大を目指します。

また、企業が協賛・寄付・協力を通じてアートと出会い、創造的な視点や価値観を取り入れることによって、社内に新たなエネルギーが生まれるような機会の創出を目指します。芸術祭への関与が、企業内での対話や気づきを促し、人材育成や組織の活性化、さらには企業活動の広がりにつながることを想定しています。そうした企業の内発的な変化が、地域社会における関係性や活動にも波及し、新たな活力をもたらす循環を生み出すことを、本芸術祭の大きな方針のひとつとしています。

評価

本芸術祭の評価は、本会期の終了後、令和7年度中に行います。

評価にあたっては、定量・定性両面から成果を把握します。具体的には、鑑賞・体験として来場者数、広報としてSNSフォロワー数などの定量的なデータを把握するとともに、参加者の意識変容・行動変容の状況などの定性的な視点からも丁寧に状況を把握し、評価します。

評価は今回の芸術祭を見つめなおす機会とするとともに、記録、アーカイブの観点でも活用を図りながら、次回以降への継続的な改善へとつないでいきます。

スケジュール

項目	2025									2026			
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
開催期間	まちなかリサーチ・制作期間						集中展示・発表期間			振り返り期間			
アートプロジェクト	リサーチ			制作			展示・発表			振り返り			
	拠点検討			ワークショップ									
	プロジェクトチーム結成			市民参加（ラーニングプログラム含む）									
アートアンデパンダン展	募集準備			出品募集			展示準備			展示・発表			
ちくわ部	企画・開催準備			vol.1		vol.2		vol.3					
企業協賛・寄付・協力	募集												
記録・アーカイブ	アーカイブ計画			記録			アーカイブ制作						

※プロセスそのものが作品であるアートプロジェクトでは、「リサーチ・制作」「展示・発表」「振り返り」の期間が一連となることで成り立つ。

どのプロセスでも市民の関わりしるをもち、参加できる場やプログラムを実施。

各アートプロジェクトについて

実際の内容は検討の結果、変わる可能性があります。

No.	アーティスト	プロジェクト名	主な展開エリア	市民参加のかたち	詳細ページ
1	安西 剛	Giant Micro Plastic	海浜エリア／高洲第二中学校	ワークショップ、展示鑑賞	p.36
2	伊東 敏光	明日の耳、チバの声	千葉公園周辺エリアまたは西千葉エリア	材料提供、制作参加、展示鑑賞	p.37
3	岩沢兄弟	カメラ遊物店／アーツうなぎ	市場町・亥鼻エリア／アーツうなぎ	ワークショップ、展示鑑賞	p.38
4	上野 悠河 ※	Tele-Interference Countepoints (in Chiba)	千葉駅周辺エリア	材料提供、展示鑑賞	p.39
5	宇治野 宗輝	House of Homy and Tansu Robo	市場町・亥鼻エリア／旧診療所	材料提供、展示鑑賞	p.40
6	加藤 翼	未定	市内団地	ワークショップ、展示鑑賞	p.41
7	栗原 良彰	わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！	海浜エリア／高洲第二中学校の体育館	ワークショップ、展示鑑賞	p.42
8	鈴木 のぞみ	Words of Light 光の言葉	市場町・亥鼻エリア／亥鼻地区のまちなか、住宅	ワークショップ、展示鑑賞	p.43
9	諏訪部 佐代子 ※	変わりゆくちばを形にする	千葉市内の遊休空間、公共施設など + 千葉公園周辺エリア	ワークショップ、展示鑑賞	p.44
10	第二副都心 ※	第二副都心_千葉市海浜地区プロジェクト	海浜エリア／公共施設など	地域調査、観光体験、展示鑑賞	p.45
11	高嶺 格	脱皮的彫刻	検討中	ワークショップ、展示鑑賞	p.46
12	地村 洋平 ※	ゴロゴロの風景	千葉駅周辺エリア／千葉駅周辺のまちなか、千葉駅近辺ビルの一室	制作参加、展示鑑賞	p.47
13	手と具 ※	景色の変遷における場所性の観測	千葉公園周辺エリア／千葉公園近辺のビルの一室、陶芸工房など	ワークショップ、展示鑑賞	p.48
14	TMPR	今昔絵有動物借景	千葉市動物公園など	制作参加、ワークショップ、展示鑑賞	p.49
15	西尾 美也	まちばのまちばり	西千葉エリア／西千葉工作室など	制作参加、ワークショップ、展示鑑賞	p.50
16	西原 珉 (キュレーター)	ジオラマのにわをつくる	千葉県こども病院	リサーチ対象、ワークショップ	p.51
17	沼田 侑香 ※	未定	市場町・亥鼻エリア／モノレール県庁前駅	展示鑑賞	p.52
18	檜皮 一彦	未定	千葉市内各所	ワークショップ、展示鑑賞	p.53
19	藤 浩志	33年後のかえる	花見川団地、そごう千葉店前、きぼーるほか	ワークショップ、展示鑑賞	p.54
20	前島 悠太	対話の対話による対話のための旗 (仮)	千葉市内各所	ワークショップ、展示鑑賞	p.55
21	水口 理琉	型をつける	千葉駅周辺エリア／空き店舗	ワークショップ、リサーチ対象	p.56
22	宮本 はなえ ※	ちからちへ 障害がある仲間たちとつくる「ち」 型モニュメントプロジェクト	市内商業施設、福祉施設など	制作参加、ワークショップ、展示鑑賞	p.57
23	箭内 道彦	未定	千葉市内各所の公的機関など	展示鑑賞	p.58
24	Alexey Krupnik ※	秘密の人々	千葉駅周辺エリア	リサーチ対象、展示鑑賞	p.59
25	Alina Bliumis and Jeff Bliumis ※	家族の夕食のための絵画	千葉駅周辺エリア	リサーチ対象、制作参加、展示鑑賞	p.60
26	Chaal.Chaal.Agency, with lead artists Sebastián Trujillo-Torres and Kruti Shah	移動式縁側	千葉市内各所の街角	参加型展示鑑賞	p.61
27	Gregory Maass&Nayoungim	PSYCHOBUILDING	千葉市動物公園ほか	ワークショップ、展示鑑賞	p.62
28	Maša Travljanin ※	I WISH TOMORROW	千葉市内各所の屋外サイネージなど	ワークショップ、展示鑑賞	p.63
29	Shi Yuxin ※	シティゲーム	千葉市内各所の街角	ワークショップ、展示鑑賞	p.64
30	Simon Whetham ※	未定	千葉駅周辺エリア／ビルの一室	材料提供、展示鑑賞	p.65
31	Slow Art Collective	未定	千葉県こども病院ほか	制作参加、ワークショップ、展示鑑賞	p.66
32	Zhang Jie (ReBuild Lab) ※	未定	千葉市内各所	制作参加、展示鑑賞	p.67
33		天馬船プロジェクト	花見川	ドネーション、観戦	p.68
34		アーティスト×スケータープロジェクト	千葉市役所周辺エリア／国道357号上部空間	参加型展示鑑賞、ワークショップ	p.69

※千葉国際芸術祭2025 アーティスト公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」により選出

アートプロジェクト

Giant Micro Plastic

「Giant Micro Plastic」は、私たちの目には見えにくいマイクロプラスチックを、巨大な造形作品として可視化するアートプロジェクトである。

現代社会において、プラスチックごみの問題は深刻化しているが、その中でも特にマイクロプラスチックは、目に見えないがゆえに実感しにくく、議論が後回しになりがちという課題がある。本プロジェクトでは、実際に海岸で採取したマイクロプラスチックをマクロレンズでクローズアップ撮影し、その質感や形状をもとに巨大なペーパークラフト彫刻として再構築する。

このプロセスを通じて、微細なプラスチックが持つ意外とも言える美しさや異物感を強調し、鑑賞者に「見えない問題」としてのマイクロプラスチックを再認識してもらうことを目的としている。

また、地元の若者と協力しながら、マイクロプラスチックの採取やワークショップを実施することで、環境問題への関心を深める機会を生み出すことを想定している。本プロジェクトは、アートと環境教育を融合させ、身近な問題を新たな視点から捉える試みである。

ワークショップの提案「マイクロプラスチックで万華鏡を作ろう！」

主に小学生を対象に、カラフルなビーズを自分で採取したマイクロプラスチックに置き換えて作って覗いてみるという試み。ワークショップで制作した万華鏡は持って帰ることができるようにする。マイクロプラスチックの採取ではワークショップ参加者と地元のビーチ清掃のボランティアのコラボレーションの実現を目指している。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



©安西 剛 / Tsuyoshi Anzai

安西 剛

現代美術作家。キネティック&ビデオアーティスト。

1987年生まれ。千葉県在住。2011年 東京藝術大学大学院映像研究科修士課程修了。プラスチック製の日用品などを用い、人間とモノとの関係を問い直す作品を制作している。金沢21世紀美術館にて個展『アベルト12 安西剛 「ポリ-」』を開催。ポーラ美術振興財団より若手芸術家の在外研修助成を得てベルリンのクンストラーハウス・ベタニエンで1年間滞在制作。ブダペストのルートヴィヒ美術館で開催されたグループ展『EXTENDED PRESENT -TRANSIENT REALITIES』に出品。

アートプロジェクト

明日の耳、チバの声

家族連れやカップルで賑わう千葉公園の一角に、大きなホーン状の收音部(耳)を備えた直径4m高さ4.5mほどの内部空間を持った小屋を設置する。

小屋は雪国にある「かまくら」のような形状で、千葉のあちこちで解体された建築廃材を組み合わせて制作する。芝生に伸びたり空に向かったりする数個の耳からは、子供達のはしゃぐ声や風の音がホーン(耳)から小屋の内部に入り込み、廃材の隙間から漏れ日が差し込む空間の中で、千葉公園に内在する普段気付かないこの場所の特性が、抽象性を帯びて現れる。

この場所にはかつて日本軍鉄道連隊の演習場があり若い兵士の掛け声が響いていたこともあったであろう。また現在は市民の公園として人々の憩う声が聞こえてくる。そして未来にはこの場所でどんな音が響くのか。

私たちは自然環境と、人々の暮らしが生み出した人口的な環境の下で生活している。本作の内部で聞くこの場所が発する音は、視覚中心の認識とは少し違う感覚を私たちに与えてくれる。

風や雨の音、自動車やモノレールの音、人々の発する声など、自然と人間の作り出す音に耳を傾け、日常生活で忘れがちな、自然や、人の営みや、過去や未来に思いを馳せる時間を、本作品によって提供する。

市民参加のかたち：材料提供・制作参加・展示鑑賞



ダイダラルウルトラボウ / 瀬戸内国際芸術祭2022

伊東 敏光

1959年千葉生まれ。1987東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。広島市立大学芸術学部名誉教授。近年は「風景と彫刻」をテーマに、それぞれの場の歴史や風土のリサーチからもたらされるインスピレーションを造形化する試みを続けている。近年の主な展覧会として、2015「LA ART SHOW 2015」ロサンゼルス コンベンションセンター / 「アートフェア東京2016」東京国際フォーラム / 2016「彫刻-気概と意外」東京芸術大学大学美術館陳列館 / 2017 個展KEUMSAN GALLERY (韓国 ソウル市) / 2018 個展 FEI ART MUSEUM YOKOHAMA (神奈川県) / 2018 平昌文化オリンピックイベント「FIRE ART FESTA 2018 -献火歌-」江陵鏡浦海岸 (韓国 江陵市) / 「瀬戸内国際芸術祭2016,2019,2022,2025」(香川県小豆島町)等。

アートプロジェクト

キメラ遊物店/アーツうなぎ

市民参加のかたち：展示鑑賞・ワークショップ

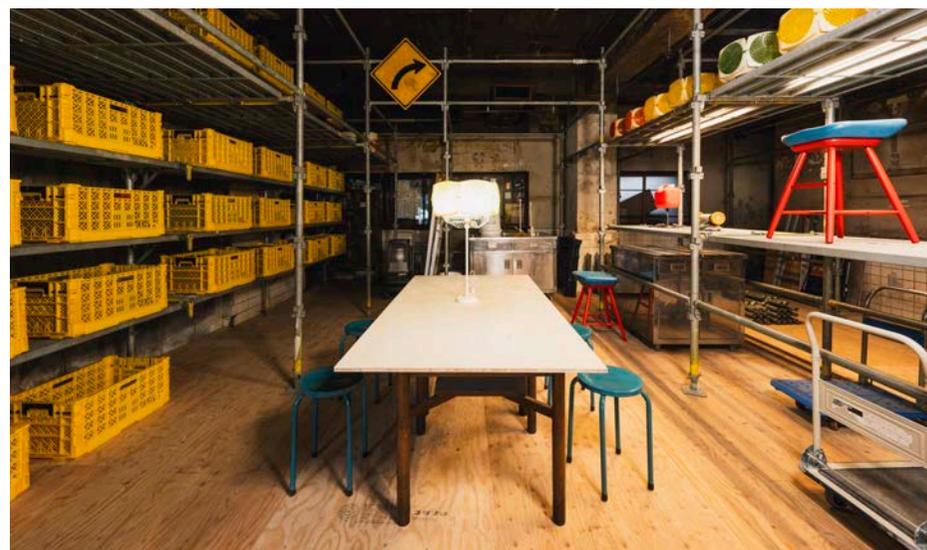
1871年に千葉県内で創業し、2014年に閉店した老舗割烹店「うなぎ安田」の元店舗を舞台としたアートプロジェクト。千葉市市場町で10年以上閉じていた歴史ある建造物を、市場町で生まれ育ったクリエイターユニット「岩沢兄弟」が新たな姿でひらいていく。

元厨房の1階は、岩沢兄弟がユニークなものづくりを展開する「キメラ遊物店」として運営。まちから集めた材料置き場・工房・店舗を兼ね、さまざまなモノとモノ、アイデアを組み合わせた「キメラ遊物」が岩沢兄弟とその仲間達によって日々生み出されていく。来場者はものづくりの様子を覗きつつ、ときどき開催されるワークショップに参加したり、材料やキメラ遊物を購入できる。時期によっては、岩沢兄・ひとしによる「なんでも公式グッズ“セルフ”」が立ち上がり、「芸術祭オフィシャル非公式グッズ」が制作される予定。

また2階は、千葉国際芸術祭2025のコミュニティ&インフォメーションセンター「アーツうなぎ」として活用。元割烹店らしい趣きが残る空間で、アートに関するトークイベントや交流会、芸術祭の情報発信が行われる予定である。

岩沢兄弟

「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛けるクリエイターユニット。兄弟ともに千葉県千葉市生まれ。空間・家具などの立体物設計、デジタル・アナログ両方のツールを活用したコミュニケーション設計、企業のオフィス空間からアートプロジェクトの拠点づくりまで幅広いプロジェクトを担当。



アートプロジェクト

Tele-Interference Counterpoints (in Chiba)

市民参加のかたち：材料提供・展示鑑賞

本プロジェクトは、廃棄予定の蛍光灯を回収・整備し、街を照らすインスタレーションとして再生する取り組みである。蛍光灯の「2027年製造・輸出入禁止」を背景に、今しかできない表現として企画された。市内各所から蛍光灯を集める「回収フェーズ」と、それらを使った明滅する光の展示を行う「展示フェーズ」で構成される。展示は屋外または外から見える屋内で夜間点灯による演出を行う。光のゆらぎは懐かしさやペーソスを想起させる一方、集積することで新たな表情を生む。展示と並行し、各フェーズの記録や素材にまつわる記憶・経験の共有も重視。蛍光灯を通じて、個人と地域、消費と循環、記憶と未来をつなぐ美術の役割を探る。展示時は常時1名の見守り体制が必要。本企画を通して、エシカルな消費やものの循環に対する意識を高める契機となることを目指す。

上野悠河

現代音楽への関心やオーケストラの打楽器に所属していた経験から、1960~70年代の美術史研究を経て、現代における人間や「もの」の複雑な振る舞い、関係性、有限性に焦点を当てた作品を発表している。レディ・メイドの道具や機材、その機能を実際に利用し組み合わせたサウンド・アートやインスタレーション・アートを軸に表現しているほか、ミュージシャン「Mus'c」（ムスク）としても活動。主な展示に、個展「ものたちは、歌い、蔑み、愛し合った」（千葉市民ギャラリー・いなげ）、「SICF23 EXHIBITION部門 受賞者展」（スパイラル）、「ZOU-NO-HANA FUTURE SCAPÉ PROJECT 2022」（象の鼻テラス）など。「ClafT（中央線芸術祭）」に2021年から参加・出展。また「SICF23」大巻伸嗣賞、「第二回ISAC国際作曲コンテスト」Special Prize (Special Mentioned)、「島村楽器 録れコン2022」グランプリなど、展示／受賞多数。



参考作品「Tele-Interference Counterpoints (Helix)」2024, 千葉市民ギャラリー・いなげ/千葉

アートプロジェクト

House of Homy and Tansu Robo

市民参加のかたち：材料提供・展示鑑賞

今回この芸術祭に参加するにあたり、県庁所在地である千葉市の基盤が20世紀前半「軍都千葉」と呼ばれた大規模な軍備にあったという歴史を知る事になった。軍都として近代の幕が開き20世紀後半に完成した豊かな都市文化の千葉市において「2025年の国際展」という流れの上に大量生産された工業製品を組み合わせ、アナログのインダストリアルなビートを鳴らすサウンド・スカルプチュア《タンスロボ》や、日本の近代をテーマにした映像作品等を設置。プロジェクト展開予定地の特徴である、和風の引き戸が入り口の鉄骨とモルタルの建造物（工業製品）と共に風化／廃墟化（自然）しているという環境で、20世紀の痛みと享楽が、戦争と平和が、つながる過去と現在が、多面的に立ち上がる豊かな構造を作ることができるのではないか、という希望を感じた。

展示プランとして検討している内容は、まず上階部分に《リファーマビッシュド・タンスロボ》。少し上半身を起こして、壁に寄りかかるような立体的になるだろう。現実的にはドローイングより人体のフォルムから離れてリファーマビッシュドと言いつつ、人体から抽象形態に向かい壊れているような形態になるであろう。

下の階には、《Homy and the Rotators》と新作映像作品。この2つと上階のタンスロボの、映像と音声、モーター機器の動きと音で作品の時間軸を構成するプラン。「Refurbish（再生）」に限定することなく、20世紀後半からのリアリティを基盤に、共通点と相違点をテーマに新たな形の《Tansu Robo》が展開される。



宇治野宗輝 《THE BALLAD OF EXTENDED BACKYARD》 2010年
日産セドリックバン、木製家具、家電機器、ミクスト・メディア
サイズ可変 作家蔵

展示風景：「六本木クロッシング2010展：芸術は可能か？」森美術館（東京）、2010年
撮影：木奥恵三 画像提供：森美術館

宇治野 宗輝

1964年、東京都生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻卒業。90年代より、電気製品を用いたサウンドスカルプチャーを制作。大量消費社会が急速に拡大した20世紀後半以降のシンボリック・アイコンを「回転するモーター」に設定し、アートを通じた「物質世界のリサーチ」を標榜する。世界各地で個展を開催し企画展にも多数参加している。

アートプロジェクト

未定

市民参加のかたち：ワークショップ

加藤翼のパフォーマンス、構造体、ビデオといった複層的なメディア・プロジェクト。そこに見られる一貫した特徴は共同実践である。なかでも代表的な作品シリーズ「Pull and Raise」の実践においては（ロープで巨大な構造体を動かす行為への）自発的な参加を周囲の者に委ねている。

公共空間にパフォーマンスなプロジェクトを持ち込む一方で、韓国／日本間の無人島を舞台とした作品「言葉が通じない」のように他者との境界線に触れる活動も展開し、2011年震災後の福島でのプロジェクト以降、そのスタイルは現代社会への風刺性をより増すこととなった。――お互いに縛られた四人の白人男性がアメリカ国歌を演奏する「Woodstock 2017」。立ち退きに直面した難民コミュニティが家のような構造体を引っ張り倒す「Break it Before it's Broken」。

こうしたプロジェクトの実践とそれらが織りなすインスタレーション空間は、見る者に私たちが抱える距離について改めて見つめ直すよう問いかける。



The Lighthouses - 11.3 PROJECT 2011 Photo: 宮島徑

加藤 翼

1984 埼玉県生まれ 東京都在住

2007 武蔵野美術大学 造形学部 油絵学科 卒業

2010 東京藝術大学 大学院美術研究科絵画専攻油画 修了

2015-17 ワシントン大学 建築科 客員研究員

文化庁 新進芸術家海外研修員

日米友好基金 日米芸術家交換計画派遣芸術家

アートプロジェクト

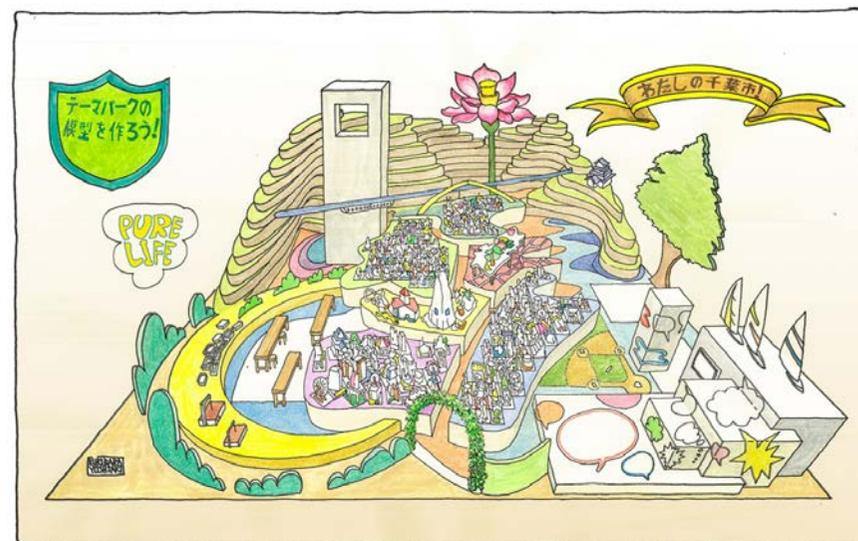
わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

本プロジェクトでは、千葉市内各区のアフタースクールや各施設において、「千葉市をテーマにしたテーマパーク」を題材とした建築模型制作のワークショップを実施している子供から大人まで、様々な人にみんなに自慢したい千葉市の名所や、自分だけが知っている景色や自慢したいものを集めて工作する。普段、生活している自分たちの場所を改めて考えることで発見があったり、他の参加者の作品を見て新たな興味が生まれたりするワークショップである。このワークショップでは、実際に建築模型を作る材料や道具を使用する。主にスチレンボードや発泡スチロールなどの素材を使用し、普段の生活や授業では触れることの少ない電熱線などの道具を使う。

このワークショップの特徴として、栗原が千葉市をリサーチして発見した千葉市のモチーフをカットしてあるものを材料の一つとして自由に使える。下の画像は、カットデータのサンプルとなる。直接手で触れて、いっぱい使って、自由に発想して、スタッフと共に作り上げていく。完成された約200個の作品を一堂に集めて巨大な建築模型を作り出す予定である。みんなが見ている、考えている、感じている「千葉市」が集まり、千葉市の形を作っていく。

会場内にはワークショップスペースを設けたり、千葉市のいろいろなカテゴリごとのおすすめスポット紹介コーナーや、展示会場自体をテーマパークにした鑑賞、体験スポットなども検討中。ワークショップ参加者も来場者も、みんなキャストになって、このテーマパークを作り上げていく。



栗原 良彰

1980年 群馬県生まれ、在住。東京藝術大学大学院博士課程修了。博士論文『《F.E.S.-Fantastic Eccentric Show-》新たな「場」作りから生まれる世界』。

アーティストは、自由の体現者であるべきだという考えを持ち、従来のアートの制度に捕らわれることなく、アートが社会に対してアクチュアルに機能することを目的に活動している。特定の表現スタイルにこだわらず、彫刻や絵画、インスタレーション、ビデオ、パフォーマンス、映画、ワークショップなど、あらゆる表現方法で制作活動を行っている。

アートプロジェクト

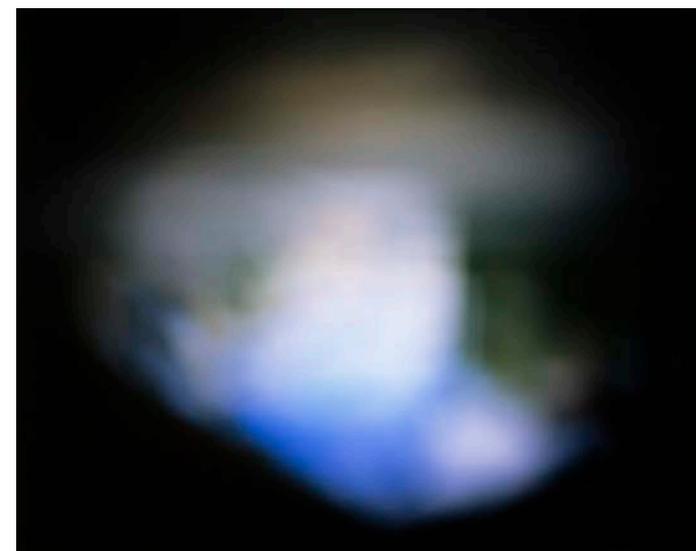
Words of Light 光の言葉

私は光の諸現象により事物に見出すことができる潜像を〈事物の記憶〉であると捉え、写真の原理を通して顕在化を試みている。「Words of Light」とは、光によって描写された自発的な像が「photography（写真）」と呼ばれる以前に、W・H・フォックス・タルボットが写真とそれを生み出す自然とのあいだの関係を表そうと記した語句のひとつである。

私たちの暮らしには、さまざまな用途や意匠、生物の営み、あるいは欠損から穴があいている事物が存在している。日常では他の光に紛れているが、それらの穴に生じている小穴投影現象（ピンホールカメラの原理）により結ばれている光の像は、いま、ここに確かに存在する。それはまるで、光が人知れず独白を囁いているようだ。

このプロジェクトでは、市民の方と協同して千葉市内の小穴投影現象が生じている穴を探索し、私たちの身のまわりにある「ピンホール」と呼ぶにはやや大きすぎる穴が映し出す光の像をフィルムや印画紙などの感光材に定着することで、そこかしこに溢れている「光の言葉」を可視化する。小穴投影現象により生じている光の像をさまざまな感光材に受けとめる行為とは、多様な写真言語を通して「光の言葉」を翻訳する行為であるといえるのではないか。私はここに提示されるイメージの作者ではなく、「光の言葉」の媒介者であり、翻訳者であれたらと思う。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



《Words of Light：壊れた塵取りの穴から 埼玉》 2021年、リバーサルフィルム、20.3×25.4cm

鈴木 のぞみ

1983年埼玉県生まれ。2007年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。2022年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。主な展覧会に「The Mirror, the Window, and the Telescope」（ポーラ美術館 アトリウムギャラリー、2024年）、「Words of Light」（第一生命ギャラリー、東京、2024年）、「潜在景色」（アーツ前橋、2022年）、「メディウムとディメンション：Liminal」（柿の木荘、東京、2022年）、「MOT サテライト2018 秋 うごきだす物語」（白河二丁目町会会館/大島倉庫、東京、2018年）、「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol. 14」（東京都写真美術館、2017年）、「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」（埼玉県立近代美術館、2016年）などがある。平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修。

アートプロジェクト

変わりゆくちばを形にする

このプロジェクトは、千葉市民を対象にしたワークショップを通して、市内で過ごす日常の中にある「変わりゆく（エフェメラル）なもの」を土で形に残し、焼き締め（野焼き）によって作品化し展示する取り組みである。参加者と街を歩きながら、風景や記憶に残したいものを粘土で拓本のように記録し、最終的にインスタレーションとして発表する。素材には地域の粘土を使用し、手を動かす体験から自然とのつながりを感じ、自分や他者、環境へのケアの意識を育てる。展示では、地域文化や記憶を未来に伝えるメッセージとし、千葉開府900年という節目にあわせて、過去と未来の視点から現在の暮らしを見つめ直す。市民同士の協働による作品制作を通じて、地域のつながりを生み、孤立感の緩和や文化的な誇りの醸成にもつなげることを目指す。展示場所は千葉市内の遊休空間を予定し、プロジェクト期間は2025年7月から12月まで。ワークショップは全3回、各回15人程度の参加を想定している。



撮影 横山渚 / 企画 Primipedites

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

諏訪部 佐代子

1995年千葉県生まれ。2019年東京藝術大学美術学部油画専攻卒業、2023年同大学院グローバルアートプラクティス修士課程修了。卒業制作展2017で「サロン・ド・プランタン賞」、修士卒業制作展2022で「GAP賞」を受賞。インスタレーション作品を中心に、パフォーマンスや彫刻など幅広いメディアで制作を行う。2025年現在、同大学博士課程に在籍しながらアーティストコレクティブ [実践考古学] [Primipedites] [NULLNULL STUDIO] のメンバーとしても活動する。

作品制作のプロセスは、対話と関わりを重視している。市民の皆さんとのコミュニケーションを通じて得られる視点や、土地の記憶を感じ取る体験がインスピレーションの源である。石や土といった自然素材を用い、この場所ならではの表現を追求し、地域に新たな視点や価値を提供することを目指す。千葉市で培った経験を基盤に、この場所で創作活動を行い、過去を振り返るだけでなく、未来に向けた千葉の可能性を探る挑戦でもある。千葉市がかつて私を支えてくれたように、土地と人々とのつながりを深め、アートを通じて新たな物語を紡いでいきたいと考えている。

アートプロジェクト

第二副都心_千葉市海浜地区プロジェクト

本プロジェクトは、千葉市における副都心的地域、特に検見川浜や稲毛海岸といった埋立地域やその近隣地域を中心に、地域に蓄積された記憶や関係性を扱うことで、現代都市における孤立感や疎外感の緩和を試みるのが目的の一つである。急速な都市開発と人口流動のなかで希薄化する地域でのつながりに対し、歴史的・空間的な痕跡を手がかりに再接続を促すことを目指している。

プロジェクトは二つの軸から構成される。ひとつは、地域の方々を中心とした参加者との対話を重視した「歴史調査ツアー」で、生活のなかに埋もれた都市の記憶や変化の過程を探り出し、地域を再解釈し、またコミットしていく。もうひとつは、「観光案内所」をモチーフにした展覧会であり、「レジリエンス」、「寛容」、「癒し」をキーワードとして、調査を元に制作した作品の展示によって、視覚・空間的に地域の記憶を再構成する。

本取り組みは、現代の都市に見られる地域的アイデンティティの喪失や均質化の傾向に対し、個別的な記憶や場所性にも立脚した表現を通じて、他者や都市との新たな関係のあり方を提示しようとするものである。調査・展示のプロセス全体を通して、都市における「癒し」や「許容」、そして「どのような関わりの中から自分たちの地域が創出されていくか」を検討する機会を設ける。

地域を見直すまなざしを共有する場として、また、都市に潜む記憶をひらく試みとして、本プロジェクトに多くの視点が交わることを期待している。

市民参加のかたち：地域調査・観光体験・展示鑑賞



第二副都心

2025年1月より活動を開始。アーティストの東條陽太と春木聡を中心としたプロジェクト／アーティストコレクティブ。「副都心」という、「大都市の周辺部に発達し、都心の機能の一部を分担する副次的な中心地区」を指す言葉を足がかりに、さらにその先にある第二の副都心の可能性を表現の中で試みる。

【構成メンバー】

春木 聡

1988年 千葉市生まれ

東京芸術大学大学院美術研究科修了

これまでの参加型の取り組みとして「東京芸術大学美術部」や「KOTOBUKI meeting」などがある。

東條 陽太

1988年 東京都江戸川区生まれ

東京芸術大学大学院美術研究科修了

千葉市美浜区の埋立地での生活の影響で、文明の痕跡に強い憧れや関心を持つようになる。

千葉国際芸術祭2025「ソーシャルダイブ」において、私たちは千葉市にゆかりを持つ者のまなざしから、「どのように地域を再解釈し、またどのようにコミットできるか」を地域住民の方をはじめとした皆さんと共に考えたいと思っている。

アートプロジェクト

脱皮的彫刻

「脱皮的彫刻」は、石膏を人体に直接塗り、そこから抜け出る過程を身体的に体験するパフォーマンスである。これまでBankArt、多摩美BlueCube、バンクーバー美術館などで公演してきた。繊維を混ぜ込んだ石膏を体の後ろ半分に塗ることで、体の型を「抜け殻」のように残すことができる。千葉国際芸術祭では、この作品をパフォーマンスとしてではなく、ワークショップ形式で行い、人々の抜け殻を展示する。

市民から参加者を募り、参加者に対する聞き取りを行ったのち、ポーズを決め、石膏取りを行う。参加者の言葉（または映像）と共に展示する。

高嶺 格

1968年、鹿児島生まれ、東京在住。京都市立芸術大学漆工専攻卒。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー修了。主な個展に、「とおくてよくみえない」（横浜美術館／広島市現代美術館／霧島アートの森を巡回、2011）、「大きな休息—明日のためのガーデニング1095㎡」（せんだいメディアテーク、2008）、「スーパーキャパシターズ」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2010）、「高嶺格のクールジャパン」（水戸芸術館、2012）など。またヴェネツィア・ビエンナーレ（2003）への参加をはじめ、釜山ビエンナーレ（2004）、横浜トリエンナーレ（2005）、あいちトリエンナーレ（2015、2019）など、数々の国際展をはじめ国内外のグループ展に多数出品。90年代にパフォーマーとしてダムタイプで活動したほか、ダンス作品における舞台美術や音楽家とのコラボレーションなど、他ジャンルとの共同制作も数多い。多摩美術大学彫刻学科教授。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



Photo : 長田朋子



アートプロジェクト

ゴロゴロの風景

《ゴロゴロの風景》は、作家自身がガラス製のタイヤを転がして都市を移動し、その摩耗や変形を通じて土地の記憶を刻むアートプロジェクトである。シャフトに設置した小型カメラが、転がるガラス越しに風景を撮影し、展示ではガラスの実物と歪んだ風景映像を並置する。展示場所は半暗室を想定し、千葉駅周辺のビルの一室を希望。ガラスは千葉駅・千葉中央駅周辺の清掃で採取した砂埃から作る予定で、交通の要所であるこの地に蓄積された“都市の微細な痕跡”を素材として扱う。本プロジェクトは都市の変容や風景の記憶を記録・共有し、新たな対話と気づきを促すことを目的としており、明確な社会課題の解決よりも、日常の中に潜む問いを提起するアートとして機能する。地元の記憶を共有しながら撮影に同行する協力者も募集している。都市と個人の記憶が交差する旅となるだろう。

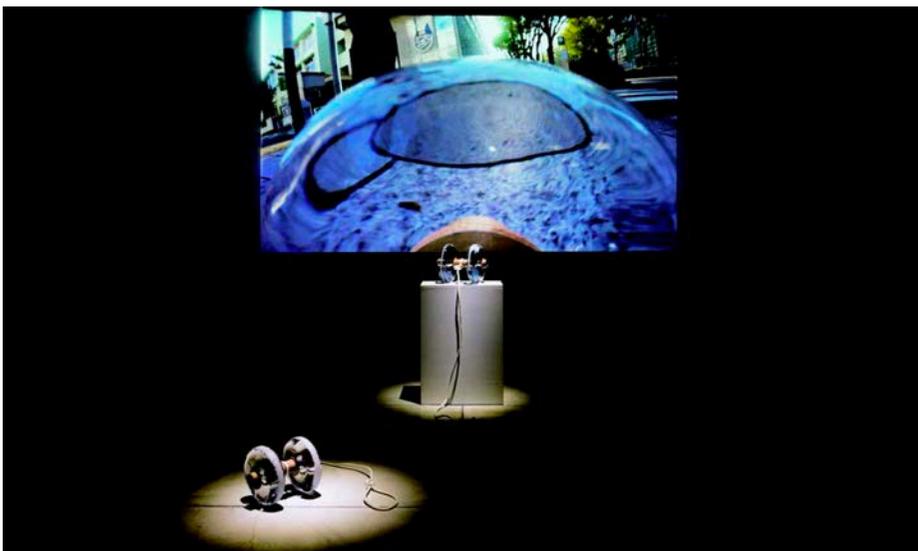


Photo : Shingo Kanagawa

市民参加のかたち：制作参加・展示鑑賞

地村 洋平

私の制作は、物質が変容し、新たな形を生み出す瞬間に焦点を当てている。金属鑄造やガラスといった伝統的な造形技法を学ぶ中で、熱が物質に与える力に魅了された。熱は、物質の形状を変え、消失や融合、再構築といった多様な現象を引き起こす。その力は、破壊と創造という、相反するプロセスを内包しており、私にとって創作の重要な軸である。この経験をもとに、私はプラスチックや他の現代的な素材をも等価に扱い、伝統と現代が交錯する視点から、多様な表現を追求している。

私の表現活動は、単なる造形表現にとどまらず、インスタレーション、映像、パフォーマンスといった形態を通じて、素材が変容するプロセスを可視化する試みである。特に、熱という普遍的な現象を媒介に、人間の活動が自然環境や物質にどのような痕跡を残しているのか、そしてそれが私たちの日常や未来にどう影響を及ぼすのかを問い直すことを目指している。溶けるプラスチックや歪むガラスは、気候変動や環境破壊といった問題を象徴するだけでなく、そこに潜む美しさや可能性をも浮かび上がらせる。

私たちが生きる現代は、自然と人工の境界が曖昧になりつつある。このような状況下で、変容する物質の姿は、私たちが未来に向けてどのような世界を形作っていくべきかを考える手がかりとなる。熱がもたらす物質の変化は、物理的な現象であると同時に、人間と自然の関係性を象徴するメタファーでもある。その中には、美しさと危うさという、相反する側面が共存しており、私はその両面を通して対話と共創の可能性を示したいと考えている。

アートプロジェクト

景色の変遷における場所性の観測

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

本企画は、千葉の土器文化をもとに、千葉の土を使って器を制作・焼成し、それが5000年後に発掘されることを想定したインスタレーションである。均質化が進む現代の街づくりや流通依存による文化の喪失に対し、地域固有の素材と手作業による景観づくりを通じ、生活と風景の再構築を目指す。展示では土と漆喰で仕上げた空間に、野焼きによる器を設置し、鉄骨構造と対比させる構成。素材の採取から展示まで、土地との関係性を深める表現となる。併せてワークショップ「身近な土からうつわを作ろう」を開催。市内で粘土を採取し、陶芸家の指導で土器を制作、最終日には野焼きを行う。対象は小学校4年生以上の市民。火の安全対策も万全に行う。この体験を通じて参加者は、千葉の過去と未来を想像し、自分の関わりが未来の景色を形づくることを実感する機会となることを目指す。



手と具

手と具は、工芸とアートという2つのジャンルの拡張と併合を基軸として活動している、アーティスト・ブランド。土地からもたらされる素材と、文化が作り出す景色に着目し、工芸とアートの価値感が堆積する「器」の表現をベースに、双方の目線から携わり制作している。

〈手〉は触れる、扱うための身体の一部、〈具〉はそなえおく用途のあるものであり、扱われる対象物を意味する。一万年以上前から続く人間の営みの本質や、ともにあった素材の実感を汲み取り、形にするとき、私たちは一万年後の未来に遺りうる風景を想像することができる。

2025年現在、千葉市中央区を拠点としながら、郊外でのフィールドワークを始めとした素材の採取や風景撮影、野焼き制作等を中心に活動中。自然と共存していく中で得られる質感や色彩を、作品として実在させることで、近代的な社会の中で忘れ去られている感覚を開放するきっかけとなることを目指している。

2022 外山慧(陶芸家/千葉陶芸工房主宰)を中心に発足

2023 手と具 STUDIO/GALLERY オープン

アートプロジェクト

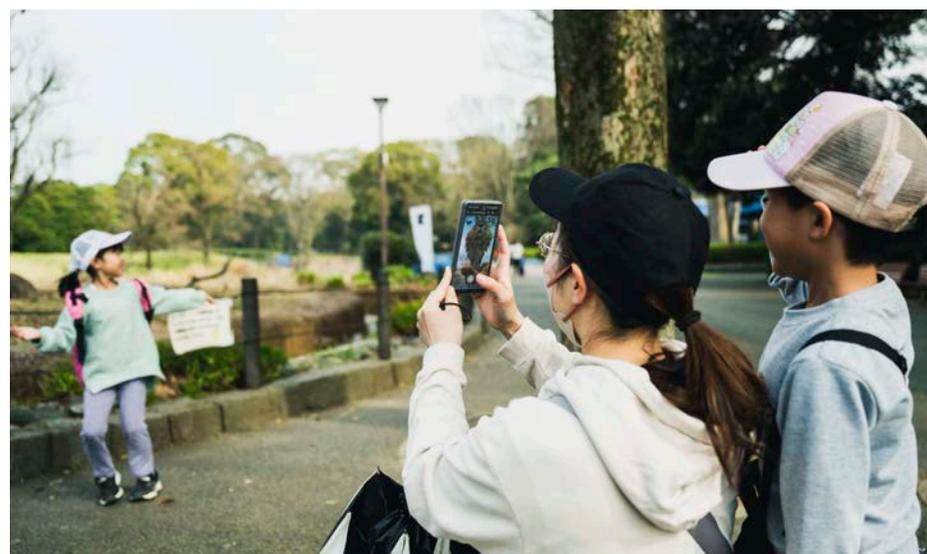
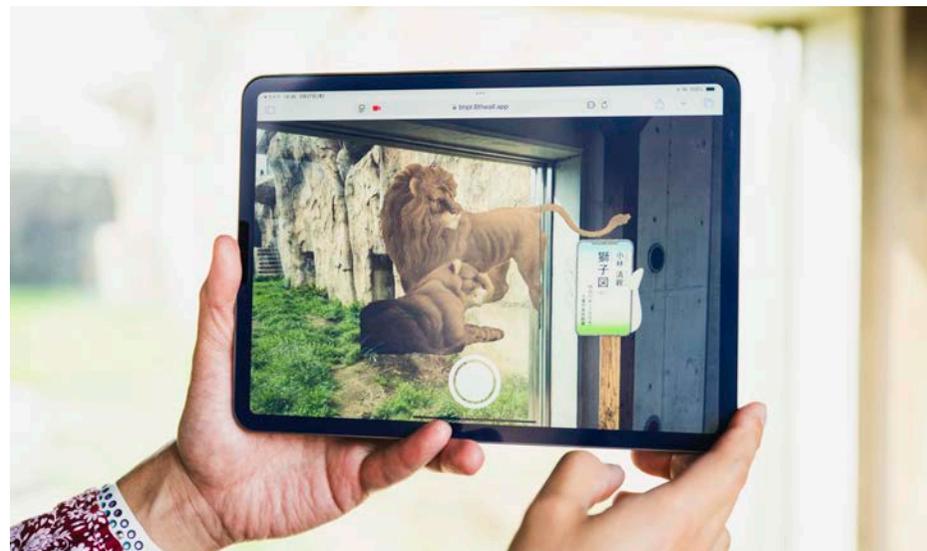
今昔絵有動物借景

千葉市美術館が所蔵するコレクションのデジタル画像によるアーカイブを市民に向けて活用するために、ARなどのデジタル技術を用いて、様々な時代の絵画や作品と現代のCG表現を組み合わせた体験を提供する。体験できる場所として、令和6年度に実施した千葉市動物公園をはじめとして、市内の施設と連携した企画としてプロジェクト実施を予定している。

TMPR（岩沢兄弟＋堀川淳一郎＋美山有＋中田一会）

デジタルとフィジカル、ハイテクと手作業、モノの視点とヒトの視点を行き来しながら、まちと遊ぶアートユニット。立体デザイナー、立体プログラマー、平面デザイナー、対物プランナー、対人プランナーが協働中。2023年結成。読み方は「てんぶら」。

市民参加のかたち：制作参加・ワークショップ・展示鑑賞



アートプロジェクト

まちばのまちばり

千葉の街場で、町のテーラーが活躍する環境をつくるプロジェクト。従来の仕立て屋のように完璧・完成を目指す。服作りではなく、まち針で仮留めしたような工作としての自由な服作りで街に貢献する。

ワークショップ「〇〇の人」への参加を重ね、市民アーティストとしての「まちまちテーラー」に認定されると、そのユニークな発想・手法をもとに、町の仕事着や個人からの注文など、町の服を仕立てていく。

本会期中に現れるインスタレーション「まちまちいちば」は、まちまちテーラーの仕事場／商品見本市／商談の場である。ユニークな服作りと市場は街場に新しい交流を生むだろう。まちまちテーラーとまちまちいちばが千葉のまち針となって、人と人の関係を繋げていく。



市民参加のかたち：制作参加・ワークショップ・展示鑑賞

西尾 美也

1982年奈良県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士（美術）。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）、奈良県立大学地域創造学部准教授などを経て、現在、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。六本木アートナイト2014ではテーマプロジェクトを手がけ、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の3ヶ所で古着を再利用した大規模な作品を発表した。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営のほか、ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」も手がける。近年の主なグループ展に、「Study：大阪関西国際芸術祭2025」、「東京ビエンナーレ2023」、「東京ビエンナーレ2020/2021」、「DOMANI・明日展」（国立新美術館、2018年）、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート展」（3331 Arts Chiyoda、2017年）、「あいちトリエンナーレ2016」、「さいたまトリエンナーレ2016」などがある。奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」プログラムディレクター（2017年～2020年）。奈良県立大学実践型アートマネジメント人材育成プログラム「CHISOU」ディレクター（2020年～2023年）。主著に、『装いは内破する』（単著、左右社、2024年）、『美術は教育』（編著、現代企画室、2024年）がある。

アートプロジェクト

ジオラマのにわをつくる

千葉県こども病院でアートプロジェクトを行う。

箱庭療法を応用して、病院の中の場所を想像の世界の場所に「見立て」てみる。中庭を撮影した写真をもとに想像を膨らませていき、こどもがイメージする世界を自由につけていく。長期入院でなかなか外に出られない子どもたちに、日常の病院との関係とは異なるツールを与えることで、こどもの創造力を喚起するような出来事を体験してもらう。本ワークショップでこどもが制作する箱庭を再現するようなパーツや風景が、実際の中庭で現実化したりすると(例えばこどもが置いた動物などのミニチュア玩具と同じ動物が中庭に現れたりするなど)、更に本ワークショップの意義が深まっていく。

①対象：4歳以上（ベッドサイドで患者さん1人ずつ実施することが可能）

②実施方法

【個別実施】

- ・所要時間(想定)：1人あたり20~30分程度
(ただし、こどもの状況により臨機応変に時間設定する)

【グループ】

オープンな集会室などのスペースで、患者さんと保護者や友だちと一緒にすることも可能。出入り自由な部屋で、参加者も出入り自由とする。

- ・所要時間(想定)：1~2時間程度

市民参加のかたち：リサーチ対象、ワークショップ



西原 珉（キュレーター/心理療法士）

東京藝術大学美術学部卒業。1990年代の現代美術シーンで活動後に渡米し、ロサンゼルスでソーシャルワーカー兼臨床心理療法士として働く。家族療法、認知行動療法を中心に多くのアプローチを実施し、個人・グループに心理療法を行うほか、シニア施設、DVシェルターなどでコミュニティを基盤とするアートプロジェクトを実施。2018年に日本に戻り、アートとレジリエンスに関わる活動を行う。2021年4月より秋田公立美術大学で教鞭をとり、また国際美術展シリーズ「SPRING 2021」「SUMMER 2022」、展覧会「When we talk about us,」(2023)、国際芸術祭「東京ビエンナーレ 2023」を手掛ける。現在、秋田市文化創造館館長、東京藝術大学先端芸術表現科准教授。

アートプロジェクト

未定

市民参加のかたち：展示鑑賞

本プロジェクトは、「日常のバグ」をテーマにした視覚体験型インスタレーションである。市内の未使用の空間をパラレルワールドとして再構成し、違和感を伴う新たな風景を提示する。観客は普段目を向けない空間に潜む「現実の不具合」に気づき、作品を通して自らの都市認識を問い直す機会を得る。視覚表現には角度によって像が変化するレンチキュラーパネルを用い、人の存在が不確かに映るよう設計。社会的には、非実用的となった建築空間の再評価と、手つかずの空間による都市の衰退という課題に光を当てることを目的とする。場所の利用者や訪問者に、日常に紛れた非日常を体験してもらうことで、都市と記憶の再接続を目指す。

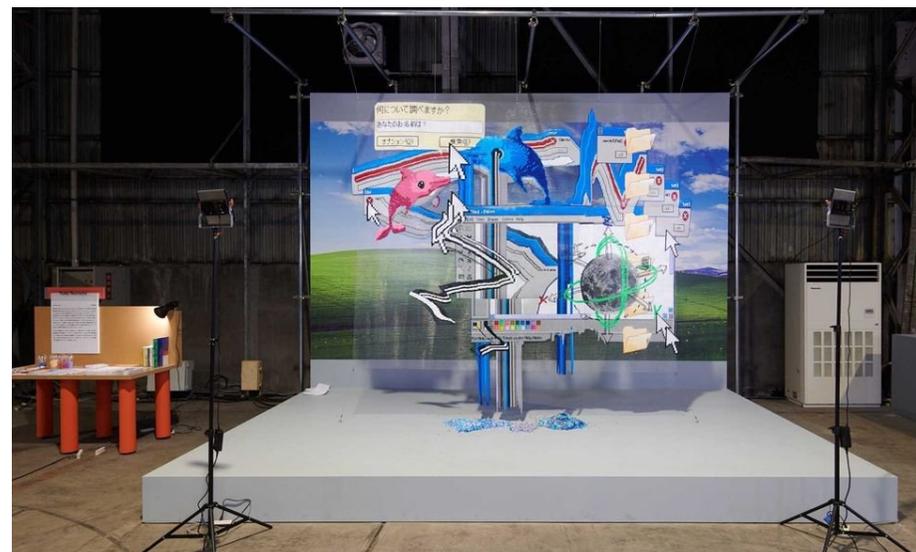


Photo: Shinichi Ichikawa

沼田 侑香

1992年千葉県千葉市出身。2022年東京藝術大学大学院油画専攻修了。アイロンビーズ等の素材を用いてコンピューターバグをモチーフとした作品を展開している。主な展示として「百年後芸術祭」（千葉県市原市、2024）、「クリテリオム100 沼田侑香」（水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城県水戸市、2024）など。その他に、NIKE Jordan Brandでのコミッションワーク作品が渋谷の店舗「World of Flight Tokyo Shibuya」に展示されている。

アートプロジェクト

未定

本芸術祭の本会期では、自身が日常生活でも移動に用いる車いすに乗り、初めて千葉市を訪れ、まちなかに滞在し、リサーチを行うことからプロジェクトを開始する。当事者性の高い体験を通して、千葉市内の移動やアクセシビリティの考察を行い、市民参加のワークショップを中心に実施する予定。檜皮氏のリサーチやプロジェクトの成果は、芸術祭のコア期間に常時展示し市民が鑑賞できるよう計画を進めている。車いすに乗るアーティストが「芸術祭」というスキームに参加することにより、芸術祭自体のアップデートが期待されるとともに、本芸術祭がより一層開かれた存在になるべく、チームと共にプロジェクトを実現していく。

檜皮 一彦

大阪府出身。京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻修了。身体性をテーマとした映像作品やパフォーマンス、自身も移動に用いる車いすを素材にしたインスタレーション作品「HIWADROME」シリーズをファーストラインに、旅やワークショップ、建築への介入を通してモビリティやアクセシビリティの考察と提案を行う「walkingpractice™」、ペインティングを中心とした「DRAWING EXPERIMENT」、車いす編み機による路面レコーディングプロジェクト「TRAIL by walkingpractice™」、「Electric wheelchair soundgenerator」を用いたノイズサウンドギグなどを展開している。最近の展覧会「アブソリュート・チェアーズ」(埼玉県立近代美術館 / 埼玉、愛知県美術館 / 愛知 / 2024)、「MICUSRAT -MUSIC LOVES ART-」(中之島フェスティバルタワー / 大阪 / 2024)、「おかえり、ヨコハマ」(横浜美術館 / 神奈川 / 2025)、「Study : 大阪関西国際芸術祭」(EXPO 2025 大阪・関西万博会場夢洲 / 大阪 / 2025)

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



アートプロジェクト

33年後のかえる

33年でひとつの世代が入れ替わる。2世代で66年、3世代で99年となる。

私の娘が生まれた33年前、1992年は、インターネットやスマートフォンなど、デジタル文化が開花する前の時代だった。さらにその33年前、私が生まれた1960年は、プラスチック製品や電化製品、自動車が普及し始め、大気汚染や海洋汚染が始まった時代だった。

この2世代の間に、世界の流通は大きく変化し、大量の商品や情報が暮らしを変えてきた。科学技術は、人々の生活を高度かつ高速に進展させてきたが、一方で排出ガスによる大気汚染や、排水による海洋汚染、さらには気象変動による大災害など、廃棄物による影響は環境に大きな変化をもたらし、地球規模の課題となっている。

「今の子どもたちが活動を担う33年後、2058年の未来は、どのような地域社会になっているだろうか。」

私は、これまでの時代に作られてきた都市、商品、エネルギーなどが流通した後の廃棄物のあり方に注目し、活動を重ねてきた。それらが次の時代にどのように受け継がれ、どのような循環システムに還元されていくのか。そのような廃棄物の未来について、さまざまな可能性を模索したいと考えている。

この活動に関連して、子どもたちが不要になったおもちゃを交換する「かえっこ」を千葉市内の数カ所で開催する。またこれまでの活動で集まったプラスチック素材を用いて「かえるの池」を制作・展示し、33年後の地域社会や地球環境について子どもたちと考えるプロジェクト「33年後のかえる」を展開したいと考えている。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



藤 浩志

1960年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、パプアニューギニア国立芸術学校講師、東京での都市計画コンサルタント勤務を経てプロジェクト型の美術表現を全国各地で実践。92年「2025蛙の池シンポジウム」でJapan Art Scholarship（グランプリ受賞）、バングラデッシュビエンナーレ（グランプリ受賞）、サイトサンタフェビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭等の国際展の出品をはじめ、国内外のアートプロジェクトに数多く関わる。取り壊される家の柱からつくる「101匹のヤセ犬」、給料一ヶ月分のお米から始まる「お米のカエル物語」、家庭廃材を蓄積する「Vinyl Plastics Connection」、不要のおもちゃを活用した「Kaekko」「Jurassic Plastic」、架空のキーパーソンを作る「藤島八十郎」等。十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学教授

アートプロジェクト

対話の対話による対話のための旗（仮）

市民同士の対話の痕跡で旗を立てるプロジェクト。

ワークショップではそこで出会った人同士が千葉の現在や未来について自由に語り合う。ただし話す際は布やハンカチ等に「落書き」をしながら話す。ここで描かれた「落書き」は会話の中で面白いと思ったことのメモかもしれないし、相手に何かを伝えるための図やイメージかもしれない。そうやって布に残された「落書き」＝「会話の痕跡」をアーティストがつなぎ合わせることでそれは旗となる。

対話のワークショップは千葉の各所にて行われ、それぞれの場所で話し合われた千葉の現在・未来は、それぞれの場所で旗として掲げられる。

来場者は、本会期中に各所に立てられた旗を巡ることで、様々な場所における様々な「千葉」とそこでの「対話」を目にする。旗がもたらす人の循環と「千葉」の発見は、千葉市における新たな出会いとさらなる対話へとつながっていく。

前島 悠太

2002年神奈川県生まれ。2024年早稲田大学建築学科退学。2025年東京藝術大学油画専攻在籍。領域を横断しつつ、現在は主にコミュニケーションを題材にした作品やプロジェクトを展開。主な作品に、他者との会話の痕跡を記した旗を屋上に掲げる《対話について》などがある。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



アートプロジェクト

型をつける

千葉市中央区にある栄町の街を舞台に、そこに暮らす人々の記憶を残すインスタレーションとパフォーマンスを構想している。

栄町は、個性的な個人商店や古い建物が残りつつも、少しずつ姿を消している場所であり、その風景と個人の歴史を「巣」として、一時的に表の世界に運び出し、街の人たちと共有したい。

半紙やボンド等を用いたはりこの技法で、お店の内部の型を取り、それを公園に集めて再構成するプロセスを通じて、その場所に触れることで感じられる「物の記憶」を外に持ち出したい。

このプロジェクトは、栄町のお店を訪れ、店主の許可を得て内部の型を半紙で取り、それを公園に移動し再構成する形で進行する。

型取りは一つのアイテムから始め、許可を得ながら範囲を広げ、最終的にはお店の内部全体を覆うことを目指す。構造は細い鉄線を枠組みとし、半紙とボンドを重ねて半透明な膜として形成。台車は「動く巣」として機能し、街を旅しながら型を再構成し、私を覆う空間として大きくなっていく。最終的に、公園には栄町の複数のお店が記憶が内包された空間が誕生する。

市民参加のかたち：ワークショップ・リサーチ対象



水口 理琉

2000年、静岡生まれ。2023年3月東京藝術大学美術学部絵画科油画科卒業。2023年から東京藝術大学美術研究科壁画第一研究室に在学中。

即興的にその場にあるものを使って身の回りを囲う「巣づくり」を通じて、場と人が新たな関係を築くことを目的に制作をしている。

主な展示歴：「織り入って、」タイレジデンスプロジェクト@baan Noorg arts and collectives (2025) 「NESTII」オーストラリアレジデンスプロジェクト@Tanks arts centre (2024)、「INVOLVEIII」千住人情芸術祭 1DAYパフォーマンス表現街@東京北千住 (2024)「村を編む」100年後芸術祭、市原市おもてなし交流事業@千葉市原 (2024)、「未来の大芸術家たち」@平成記念アートギャラリー (2024)、第71回東京藝術大学卒業修了作品展ooiil@中央棟第6講義室 (2023)

受賞歴：平成芸術賞 (2023)、上野芸友賞 (2021)

アートプロジェクト

ちからちへ

市民参加のかたち：制作参加・ワークショップ・展示鑑賞

障がいのある仲間たちとつくる「ち」型モニュメントプロジェクト

千葉駅周辺に、障がいのある人たちとともに制作した「ち」型モニュメントを10か所に設置するプロジェクト。綺麗に整備されたまちに、かつてのストリートアートの記憶と重ねる形で、自由な表現を復活させる。モニュメントにはQRコードを添え、制作に関わった福祉施設の情報へ誘導。見る人は作品から無意識の偏見に気づき、障がいへの意識変容が促される。差別の歴史、言葉にならないメッセージ、儚さや愛、ストリートアートにも共通点を見るアール・ブリュットをまち中へ解放する。落書きや破損、天候への対応策も整備。福祉施設や関係団体と連携し、障がいのある仲間たちが、自分らしく表現し続けられる環境をつくる。社会に溶け込むアートのように、障がいのある人たちが自然と溶け込み、必要とされる社会を目指して。人もまちも変化していく様を示す、協働と発見のプロジェクトである。

宮本 はなえ

1985年千葉県四街道市出身。千葉県立検見川高等学校卒業。2010年武蔵野美術大学造形学部油画学科版画専攻卒業。双子の母。社会福祉士、保育士、調理師。社会福祉法人よつかいどう福祉会理事、同法人地域コーディネーター、及び「生活介護はちみつ」主任支援員。言葉では言い表せない感情や事象を表現するために絵を描いている。2015年より四街道市在住の若手作家によるグループ展「テンテンテンテン・・・展」を立ち上げ、今年10周年を迎える。2017年より子ども向けアートワークショップを開始。現職では、主に知的障がいのある成人のアート活動を支援。作品展企画ほか、四街道市と協同してTシャツやイベントチラシ等へのアートワーク起用を進める。アートは、言葉以外でのコミュニケーションツールとして、どんな人にも有意義なものであると考えている。10代の頃、毎日過ごした千葉駅周辺のストリートアートに惹かれ、美術を志してからアール・ブリュットに魅了されている。



アートプロジェクト

未定

市民参加のかたち：展示鑑賞

広告とアートの境界を問い直す試みとして、消防署などの壁面をキャンバスにした広告的なアートプロジェクトである。アイデアの出発点は、公共空間における「広告」と「警告」の関係性に着目することにある。特に「火の用心」という言葉を軸に、視覚的なインパクトを持つ表現を用いることで、単なる注意喚起にとどまらず、現代社会における情報の拡散や炎上文化をも照射する。

象徴的な存在として、俳優の写真を活用することを検討。モデルとなる俳優の視点を通じて「火の用心」というメッセージを再解釈することを試みる。しかし、肖像使用の許可が得られるかは不確定要素であり、そのプロセス自体も本作の一部と捉えられる。

社会の中で注意喚起と情報拡散がどのように作用し合うのか、また、公共広告の在り方そのものをアートとして再考する実験的なプロジェクトである。

箭内 道彦

1964年福島県郡山市生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業後、株式会社博報堂を経て2003年に独立し、風とロック有限会社を設立、現在に至る。タワーレコード「NO MUSIC, NO LIFE.」、リクルート「ゼクシィ」、サントリー「ほろよい」、東京メトロなど既存の枠に捉われない数々の話題の広告キャンペーンを長く手掛ける。

2008年から3年間MCを務めたNHK「トップランナー」を始め、NHK Eテレ「福島をずっと見ているTV」、TOKYO FM/JFN「風とロック」、ラジオ福島「風とロック CARAVAN福島」等、各番組のレギュラーパーソナリティとしても活動。創刊100号を数えたフリーペーパー「月刊 風とロック」の発行人・編集長でもある。東京藝術大学教授、福島県クリエイティブディレクター、渋谷のラジオ名誉局長、ロックバンド猪苗代湖ズ ギタリスト、風とロック芋煮会実行委員長、LIVE福島 風とロックSUPER野馬追（2011年）実行委員長。企画、制作、演出、撮影、出演、執筆、教鞭、作詞、作曲、MC、パーソナリティ、イベントの実行委員長、商品開発、など、領域を自在に超え、従来の概念を解体しながら、そのすべてを「広告」として、クリエイティブディレクション、ブランディング戦略を手掛ける。

アートプロジェクト

秘密の人々

市民参加のかたち：リサーチ対象・展示鑑賞

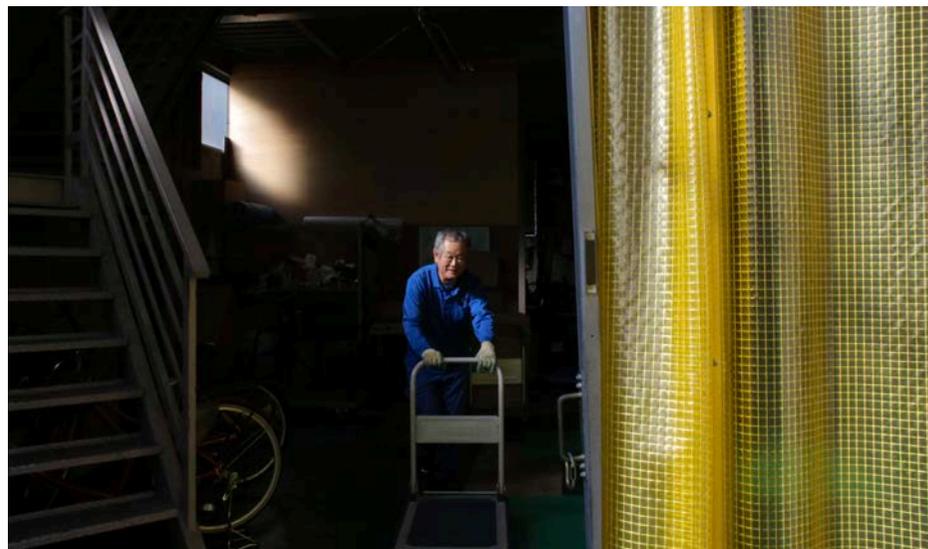
「秘密の人々」は、千葉市の見えない日常労働者たちに光を当てる写真+音声のインスタレーションである。郵便配達員や清掃員など、都市機能を支える人々の仕事風景を詩的に撮影し、彼ら自身の声で語られるモノローグとともに紹介する。モノローグはQRコードや音声ガイドでアクセス可能とし、複数言語対応で国際的観客にも開かれている。義務、友情、死、幸福などの深いテーマにも触れ、観客と語り手の感情的なつながりを生む。本プロジェクトは、千葉の文化的アイデンティティを国際的に紹介し、住民や観光客、研究者、マルチメディア愛好者に向けて都市生活を新たな視点で提示することを目指す。制作には、地元協力者、音響エンジニア、通訳、印刷・技術スタッフなどの協働が必要である。

Alexey Krupnik (ロシア)

アレクセイ・クルプニク

1990年、ロシア・モスクワで生まれた。ストリートダンスのサブカルチャーの中で創作活動を始めた。2010年代後半、ロシアでデジタル一眼レフカメラが普及する中で、自己表現の新たな手段を発見し、それが視覚芸術への情熱を呼び起こし、プロフェッショナルなキャリアの発展の原動力となった。

現在、映画監督として、ロシアの広告、アニメーション、音楽ビデオ業界で幅広い経験を有している。作品は、独特な視覚スタイル、細部にわたるこだわり、そして観客に強い印象を与える感情的に共鳴するストーリーテリングによって特徴づけられている。今日、ロシア業界で最も需要のある広告監督の一人である。



アートプロジェクト

家族の夕食のための絵画

2008年、イスラエル・バットヤム美術館での展覧会に向けて、「家族の夕食のための絵画」というプロジェクトを始めた。地域の家庭に「夕食に招待してくれたら絵を贈ります」と呼びかけ、果物の静物画に「夕食をありがとう！」という言葉を追加して制作し、それを持って家族の食卓に参加した。会話にはガイドラインを設けず、自然な交流を大切にした。食後、家族全員とソファに並び、背景に絵を掛けて記念撮影を行い、その絵はそのまま家族に贈った。こうした家庭の中での出会いとやりとりが、アートと生活の境界を越えていくきっかけとなった。

この取り組みはイスラエルから、アメリカのブルクス、中国・北京、イタリア・レッチェ、日本・東京へと広がり、これまでに51家族が迎え入れてくれた。2021年には東京ビエンナーレの「ソーシャルダイブ」にオンラインで参加し、Zoom越しに夕食をともにする形で実施した。2025年にはドイツ・ドルトムントで6カ国の実践を紹介する展覧会が開かれ、ジャーナルやレシピ、記録写真などをまとめた出版物も刊行される予定である。さらに、同年の千葉国際芸術祭では日本での対面実施が計画されている。

本プロジェクトは、絵画や夕食という形式を超えて、贈与と感謝、対話と共同創作を通じて社会的なつながりを編み直す実践である。私的な空間にアートを持ち込むことで、公共と私的の境界を再構成し、文化的・社会的な次元を家庭に注ぎ込む。参加する家族は観客ではなく、共に作品をつくる協働者であり、その場に生まれるやりとりこそが作品そのものとなる。この実践を通じて、アートが人と人との関係を開き、日常の中に社会的想像力をもたらす力を信じている。

市民参加のかたち：リサーチ対象・制作参加・展示鑑賞



©Alina Bliumis, Jeff Bliumis
Photo by Dafna Gazit



©Alina Bliumis, Jeff Bliumis
Photo by Du Yang

Alina Bliumis and Jeff Bliumis (アメリカ)

アリーナ・ブリュミス & ジェフ・ブリュミス

ベラルーシのミンスク (Alina/1993年) とモルドバのキシナウ (Jeff/1974年) からニューヨークへ移住し、School of Visual Arts (Alina/1999年) とコロンビア大学 (Jeff/1980年) を卒業した。移住の経験は、アーティストとしてのアイデンティティを探究する出発点であり、作品にとっても重要なインスピレーションの源である。個々の作品ではなくシリーズを通して社会的・政治的なテーマを探究する、リサーチベースのアプローチをとっている。多くのプロジェクトは長期的に展開され、視覚表現の幅を広げるために複数のメディアを用いている。物理的・政治的・社会的な境界を越えることは、キャリアを通じて一貫した関心の対象である。「内と外」「境界と中心」「他者と規範」といった関係性に問いを投げかけ続けており、創造的姿勢は「外在性」にある。政治的な問題を美的な体験へと転換することで、「断絶」や「他者性」といったテーマを日常に持ち込み、そこに潜む「異国性」の違和感や裂け目を浮かび上がらせようとしている。

アートプロジェクト

移動式縁側

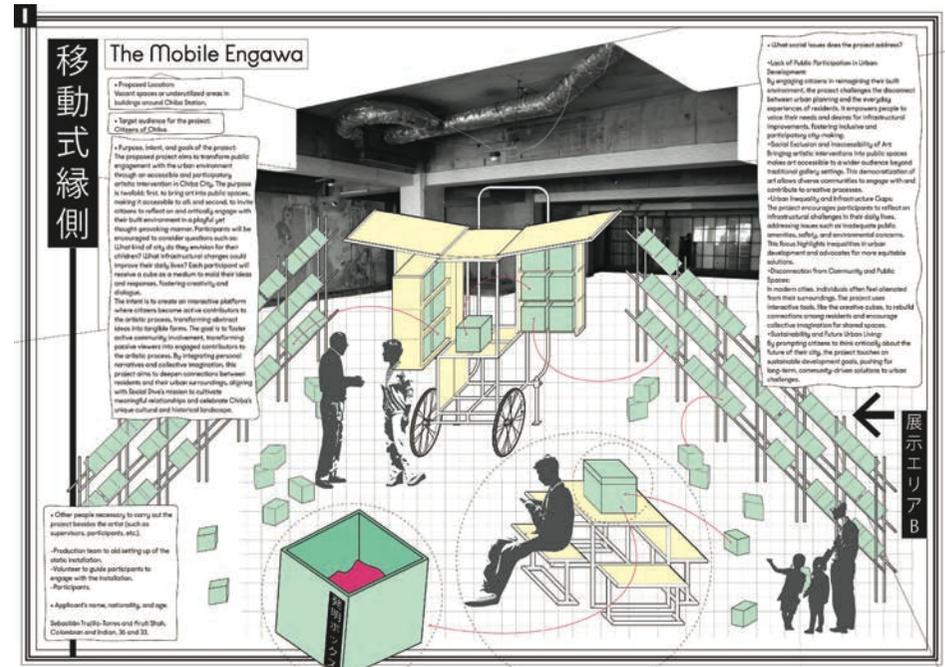
「モバイル縁側 (Mobile Engawa)」は、移動する空間として、移り変わり
と集いの両方の役割を担い、市民が自身の建築的環境をあらためて想像し直
すきっかけとなることを目指している。この移動式のインスタレーション
は、千葉市内の公共空間を巡回し、市民が身の回りの環境について、遊び心
を持ちながらも批判的な視点で考えるよう促す。参加者は「あなたが思い描
く未来の千葉はどんな姿ですか？」という問いに対し、芸術的な方法で応答
し、自らの想像をかたちにしていく。このプロセスを通じて、抽象的なアイ
デアは具体的な提案へと変換され、人と場所、制度や仕組みとの関係を深め
る対話の場が生まれる。市民は、単なる鑑賞者から、個人的な物語と集会的
な想像を交差させる能動的な共創者へと変化する。インスタレーションは参
加者一人ひとりの関わりによって日々進化していく。

Chaal.Chaal.Agency, with lead artists Sebastián Trujillo-Torres and Kruti Shah (コロンビア、インド)

チャール・チャール・エージェンシー (リードアーティスト：セバスチエン・トルヒージ
ヨ＝トーレス & クルーティ・シャー)

セバスチエン・トルヒージヨ＝トーレス とクルーティ・シャーによって2017年に設立
された、建築とアートの実践団体である。ムンバイとボゴタを拠点に活動し、アート、
インフラ、アクティビズムの交差点を探求しつつ、デザインの民主化を目指している。
参加型のツール、軽量のインフラ、大陸を越えたりサーチを通じて、グローバル・サウ
スにおける都市の未来像を再構築し、それを地球規模の想像力のテンプレートとして提
示している。

市民参加のかたち：参加型展示鑑賞



アートプロジェクト

PSYCHOBUILDING

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

千葉の5つの異なる場所に、5つの作品を提案する。さらに、1つのワークショップ、パフォーマンス作品、またはアーティストトークも提案する。

提案するすべての作品は、「フランケンシュタイン法（彫刻的・概念的な方法）」、「オリフィス法（穴／空間に関する芸術・哲学）」、「サイコビルディング（自己の状態、集団、個人、物との関係、役割思考／演技、日常生活や芸術における意味の探求に依拠する芸術）」、「パリンプセスティング（芸術とインク）」、「ファンタシー（私たちはファンタジーの時代に生きているため）」などの方法と技術を通じて、相互に関連している。

提案された作品のいくつかはすでに実現されているが、特定の文脈に合わせて現地で適応または再制作される予定である。すべての作品は相互に関係づけられており、都市全体に分散して設置されるため、当初はそれぞれ異なる特徴を持っているように見えるかもしれない。



Gregory Maass & Nayoungim（ドイツ・韓国）

グレゴリー・マース & ナヨンキム

グレゴリー・マース（1967年4月29日ドイツ、ハーゲン生まれ）とナヨンキム（韓国名：キム・ナヨン、1966年3月13日韓国、ソウル生まれ）は、グレゴリー・マース & ナヨンキムというデュオで活動する2人組のアーティストである。グレゴリー・マース & ナヨンキムが制作のために着目するのは、哲学、心理学、SF、イギリスのアート & クラフト運動、音楽、コミック、アウトサイダー・アート、サブカルチャー、そして食など、多岐に渡る。韓国のキム・キム・ギャラリーの創設者でありながら、一般的なアートギャラリーの形式はとらず、非営利で運営している。自身らの制作の傍ら、キュレーションや展覧会デザイン、希少な美術書の編集なども行う、マルチに活動するアーティストデュオである。

アートプロジェクト

I WISH TOMORROW

「I WISH TOMORROW (IWT)」は、人々の願いを星空に投影するインタラクティブ・アートプロジェクトである。七夕の伝統に着想を得て、社会的・文化的に疎外された人々にも開かれた表現の場を提供し、希望や夢を共有することを目的としている。本プロジェクトはこれまでアントワープなどで実施してきた。願いごとは短冊や絵として投稿され、デジタル化されたのち、LEDディスプレイにより空間に投影される。展覧会期間中は、願いごとをIWTのウェブサイト (www.iwt-project.com) を通じ投稿することも可能。会場にはQRコード等を設置し、来場者が容易に参加できる仕組みを整える。あわせて地域の学校、図書館、福祉施設でのワークショップも予定している。IWTは、世代や文化の違いを超えた対話と共感を促進し、社会課題や孤立、環境問題への関心を可視化することを試みるものである。展示終了後には記録を出版し、地域のアーカイブとして還元することを目指す。

Maša Travljanin (スロベニア)

マシャ・トラヴリアニン

芸術的实践は、現場でのインスタレーション、インタラクティブなプロジェクト、視覚的パターンを通じて物語を語ることに焦点を当てている。インタラクティブな作品を通じて、私は集合的な人間の経験を探求し、観客が物語の形成に積極的に参加する空間を作り出す。作品の意味は静的ではなく、メディアと観客との相互作用を通じて変化し、社会的な対話を生み出す。儀式や神話からインスピレーションを得て、それらの教えを反映させ、現代社会に対する対位法として使用している。土は参加型インスタレーションで繰り返し使用される素材となり、常に借りては返されるものだ。この素材は、物理的なつながりの基盤となり、平等化の媒介として機能する。建築家やアーティストと協力し、国際的な公共プロジェクトで現場芸術的介入を行っている。

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞



アートプロジェクト

シティゲーム

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

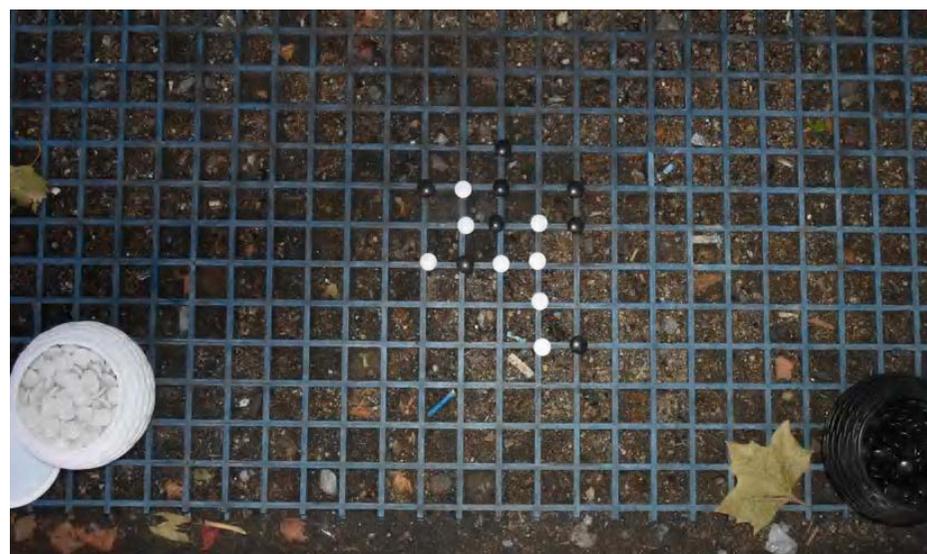
本プロジェクト「シティゲーム」は、近隣住民や歩行者を対象に公共空間での新たな関係性の構築を目指す。ゲームの形式を通じて、人と人、人と空間とのつながりを再編し、古い都市空間に新たな状況を生み出す。現地調査とマッピングにより、地域住民の日常の動線を把握し、観察と探索を通じて生活に潜む課題を見出す。その上で、課題に対応した独自のゲームルールを設定し、参加者が能動的に空間の可能性を再発見できる仕組みを構築する。過去に中国で実施された同様のプロジェクトの経験も応用される。

本プロジェクトは、過度な都市化によって生じた人と人との距離、感情の希薄化といった社会問題への応答である。ゲームという手法は、都市構造の制約を迂回し、日常に埋もれた純粋な感情や経験を引き出し、空間との情緒的つながりを再構築する可能性を持つ。現時点では特別な人員は必要としていないが、状況に応じて柔軟に対応する予定である。

Shi Yuxin (中国)

シー・ユシン

学部では版画を専攻していたが、卒業後は、作品の方向性を版画から、ゲームを用いてコミュニティや人々とのつながりを構築する実践へと転換させた。版画、インタラクティブインスタレーション、パフォーマンスなどのさまざまな表現をゲームと組み合わせ、都市の遊歩 (dérivé) やフィールドリサーチなどの調査方法を得意とする。現在は、社会のプロファイルに合わせたゲームの設計に取り組んでおり、ゲームを打破する現実的な方法を見つけ、普段の「身近な」状況に新たな局面を生み出そうとしている。彼女は本物のゲームマスターになりたいと考えている。



アートプロジェクト

未定

本プロジェクトは、観客の動きやジェスチャーによって音と光が作動する、センサー連動型インスタレーションである。千葉市の未活用空間を活用し、あらゆる年齢層の市民が参加できる体験を提供する。地元から不要な電子機器（テレビ、ラジオ、レコードプレーヤー等）を寄付として受け取り、それらをアートの構成要素として再活用する。観客は会場中央の台座で「指揮者」として作品を動かし、没入的な体験を得る。この作品は、廃棄や使い捨てが前提となる現代社会の消費文化に疑問を投げかけ、製品が再び命を吹き込まれるプロセスを示す。資源と労働力の浪費に対する意識を喚起し、物の価値と循環について考える契機となる。基本的には作家一人で実施可能だが、必要に応じて現地協力者や運搬補助が加わることも想定している。



©Simon Whetham

市民参加のかたち：材料提供・展示鑑賞

Simon Whetham (イギリス)

サイモン・ウェットテム

2005年から、パフォーマンス、作曲、インスタレーション作品のために音を創造的に使ってきた。

音を場所を探求する方法として使い、特徴的な音や隠れた音、そしてそこにかかる忍耐を体験する。このプロセスは、場所の多くの側面、物理的、社会的、心理的な側面を私に教えてくれる。このことがきっかけで、現在、消費主義や使い捨て性に起因する素材のさまざまな特性や品質を探求している。

音の潜在的なエネルギーを活用し、物体を動かすきっかけを作ったり、さまざまな素材を通じて音を鳴らし、音を変化させたりしている。予測できない、通常はアナログのシステム（例えば、天候や故障したデバイスなど）を使用し、プロセスを完全にコントロールしないようにして、協働的に進めている。近年、廃れた技術に焦点を当て、それらがどのように再利用・再活性化できるかだけでなく、なぜ廃れてしまったのか、その生産に必要な資源、そしてその後のリサイクルに関する希望や文化的な意義についても探求している。

実践の重要な側面は、レジデンシーへの参加、ワークショップの実施、パフォーマンスや公演を行うことである。特に、芸術に触れる機会が少ないグループや排除されていると感じている人々に向けて行うことに楽しみを感じ、その過程で行われる文化交流から学び、成長していることを実感している。

アートプロジェクト

未定

「紐」というシンプルな素材は、自由さと無限の可能性を秘めている。紐を用いた空間ドローイングや編み込みを通じて、新たな場を創出するプロジェクトを展開した。本作品では、既存の建築空間と共生する形で竹や鉄骨の仮設体を設置し、風や太陽の力を活かした装置と組み合わせながら、参加者が紐を結び、編むことで作品を完成させる。

これまで東京やメルボルン、クイーンズランドなど多様な環境で展開されてきたこの作品は、場所ごとに異なる意味や価値を生み出した。東京では大きなアート神社のような空間となり、メルボルン郊外では地域のトルコ人家族の憩いの場として機能し、クイーンズランドでは地元住民が交流する場となった。こうした多様な体験が生まれる背景には、参加者自身が紐を通じて作品の一部となり、空間と時間を共有するプロセスがあるからである。

特に、ある小学校での長期プロジェクトでは、子どもたちがクラスメートとこれまでにない深い対話を交わし、共に編み込む体験を通じて新たな関係性を築くことができた。このプロセスは、精神科医・斎藤環氏の提唱する「オープンダイアログ」にも通じるものであり、無理に共感や同意を求めることなく、ただ共に場を共有することの重要性を示している。

即興性と日常素材を活かし、異次元的な非日常空間を創り出すことを目指す。本プロジェクトでは、千葉の地域と連携し、千葉国際芸術祭の理念と共鳴しながら、新たな創造の場を築いている。

市民参加のかたち：制作参加・ワークショップ・展示鑑賞



Slow Art Collective (Chaco Kato & Dylan Martorell) (日本・オーストラリア)
スロー・アート・コレクティブ (加藤チャコ&ディラン・マートレル)

オーストラリアのメルボルン在住の加藤チャコとディラン・マートレルが主宰するアートコレクティブ。2009年より、環境に負荷の少ない身近な素材を駆使して、観客とともに完成させていくアートを展開している。コミュニティ、環境、自然、街、素材とのコラボレーションを大切にして、それがゆっくりと社会の中に浸透し成長していくようなアート活動のあり方を模索している。タラワラ美術館、ヌーサ美術館、マックレランド野外彫刻美術館、モーニントン半島美術館、シドニーパワーハウスミュージアム、Mパビリオン、ビクトリア国立美術館、ガートルード・コンテンポラリー、シンガポールのエスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ、その他地域の学校、アートフェスティバル、ショッピングセンターなど多岐にわたる場所で制作活動を展開している。

アートプロジェクト

未定

本プロジェクトは、善意の言葉で人々を励ます参加型インスタレーションである。困難な時期にある人々に向けて「あなたは素晴らしい、頑張っ」と伝える温かい場を提供する。観客は鑑賞者ではなく共同制作者であり、黒板状の構造物に自由に書き込むことで作品が完成する。設計と企画は応募者が担当し、設置は地元の建設チームと連絡アシスタントと協力して行う。パリのセーヌ川沿いにある自由に描ける黒板が参考例である。プロジェクトは、パンデミック以降の社会で増加したメンタルヘルスの問題や、SNSによる自己比較のストレスに応えるものである。匿名で苦難の経験を記し、それが他者への励ましとなる構造により、ネガティブな経験を共有し乗り越える希望の場をつくることを目指す。



市民参加のかたち：制作参加・展示鑑賞

Zhang Jie (ReBuild Lab) (中国)

チャン・ジエ (リビルド・ラボ)

上海を拠点に活動する空間デザイナーでありアーティストで、主に一時的なインスタレーションや空間介入を専門とし、地元の素材を再構築して日常空間に詩的な瞬間を生み出す。建築の訓練と実務経験を活かし、空間の再形成と再構築を芸術実践の中心に据えている。2020年に独立した実践を開始して以来、公共アートインスタレーション、ランドアート、キュレーションを含むさまざまなアートとデザインのプロジェクトに取り組んでいる。都市空間や日常の風景、人々とその環境との関係に関心を持ち、作品に反映させている。

彼女とスタジオ「ReBuild Lab」は、2023年の舟山「Hello, Islands」インスタレーションコンペで優れた提案賞、Reuse Italy Ruins Renovationコンペで名誉賞、2022年のタリン建築ビエンナーレビジョンコンペで名誉賞、2021年のAnn Arbor Art Center Alley Projectでショートリストノミネート、2020年のUK Bubble Futuresコンペで第1位、2019年のIndia Archismコンペで第2位を受賞。

2024年11月には、中国・嘉興で開催される「理想の大地アートシーズン (Promised Land Art Festival)」にアーティスト・イン・レジデンスとして参加し、「Roof on the Field」というランドアート作品を制作した。

アートプロジェクト

天馬船プロジェクト

天馬船プロジェクトは、もともと富山県氷見市において、漁業に活用されていた木造和船の文化的保存と漁船技術の伝承を目的に始まったアートプロジェクトである。千葉国際芸術祭の本会期では、水辺を中心とした産業やコミュニティの発展に寄与することを目的に、花見川の水辺環境の活性化・浄化活動を支援し、地域と協働するアートプロジェクトとして展開する予定がある。

本プロジェクトに特化した「天馬船プロジェクトチーム」を立ち上げ、専門家や地域で水辺の市民活動を行う人々とともに、水辺文化の「ネットワーク」を育むことを目指す。単なる一過性のイベントとして終わるのではなく、地域と連携しながら、日常の中で水辺がより身近な存在となるような関係性を築く。

本プロジェクトは「ドネーション型」の開催形式を採用し、集められた寄付金を水辺の活性化に活用することを検討する。これにより、市民の主体性・協働性を高め、持続可能な文化活動としての定着を目指す。

河川を単なる自然環境として取扱うのではなく、表現のメディアとして位置づけ、誰もが参加できる文化活動を創出する。地域社会の営みとアートの社会実践を結びつけることで、花見川の水辺環境の整備や桜の植樹など、地域に根ざした取り組みを展開して、コミュニティ・アートプロジェクトとしての新たな可能性を探求する。

市民参加のかたち：ドネーション、観戦



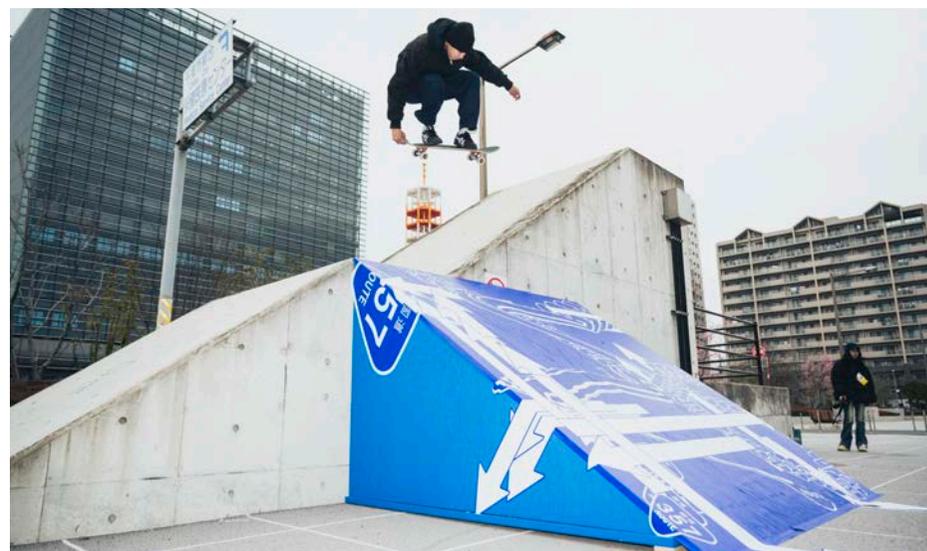
アートプロジェクト

アーティスト×スケータープロジェクト

スケートボードは1970年代にアメリカで生まれ、同時期に日本にも上陸した。千葉市内のスケートパークや公園がその文化の発展に寄与し、1993年には千葉パルコのMURASAKIPARKがオープン。近年では2022年に「X-GAMES」に合わせて「BLOCK PARTY」が千葉市で開催され、スポンサーの支援を受けて盛り上がりを見せた。スケートボードカルチャーは協調性に富んでおり、年代を超えたコミュニケーションが自然に生まれる文化として、地域の重要な因子とされている。

千葉国際芸術祭2025では、国道357号上部の空間を舞台に、スケートボードとアートを融合させたユニークな空間を展開。アーティストとスケーター双方の創造性が融合する場を創出する。

市民参加のかたち：参加型展示鑑賞・ワークショップ



その他のプロジェクトについて

その他のプロジェクト

アートアンデパンダン展

「アンデパンダン展」とは、審査や選考を一切行わず、誰でも自由に作品を発表できる展覧会です。絵画・彫刻・写真・デザイン・メディアアート・インスタレーション・工芸・文芸・書・音楽・ダンス・演劇等、多様なジャンルを対象とし、広く市民から出品作品を募集します。

本展は、創作活動に対するハードルを下げ、創造性を発揮し発表する機会をあらゆる人に提供することを目的とします。市民一人ひとりの創作活動を応援し、広く共有される場を創出することで、文化芸術の裾野を広げ、表現を通じた対話と交流の機会を育んでいきます。

市民参加のかたち：作品発表・展示鑑賞



ラーニングプログラム

各アートプロジェクトに関連して、アーティストによる市民参加型のプログラムを展開します。ワークショップやトークイベント、作品制作への参加、リサーチ対象となることなどを通して、参加者はプロジェクトの背後にある概念やアーティストの思考に深く触れる機会を得ます。

単なる鑑賞にとどまらず、対話や実践を通じた参加によって、知的理解と身体的経験が交差し、深い体験となります。それによって、参加者の価値観や世界の捉え方が変わり、行動変容へとつながることを目指します。

市民参加のかたち：制作参加、ワークショップ、講座など



その他のプロジェクト

ちくわ部

「ちくわ部」は、千葉市にゆかりのある人々が、芸術祭を“口実”に出会い、対話を通じてつながること・自分たちの暮らしを考えることを目的とした対話型ワークショップイベントです。名称には、「千葉市で」「企て（くわだて）」「輪になって話す」という意味を込めています。

本企画は、文化芸術やまちのことに関心のある方はもちろん、「芸術祭」が自分の生活から遠く感じられる方にもひらかれ、所属や肩書にとらわれず多様な市民が集える場です。外部ゲストの話をきっかけにしながら、参加者同士が身近な話題や社会的なテーマについて語り合い、それぞれの暮らしの楽しさや心地よさを、共に考える機会とします。

また、対話のプロセスを通じて、千葉市内で芸術祭を共につくる仲間を育み、地域にゆるやかなつながりを育てていきます。

市民参加のかたち：対話型ワークショップ



千葉開府 900年



千の葉に 時を刻んで 900年